
遊戯王 ~ C L O S S H E R O ~

龍南

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王〜CLOSS HERO〜

【Nコード】

N9321U

【作者名】

龍南

【あらすじ】

・・・ここはどこだ？俺は死んだはずでは？ってここ見たことあるなと思ったら5D'sの世界かよ！っていうことは俺は転生者！？これからどうすりゃいいんだよ。

遊戯王5D'sの二次創作小説です。主人公はオリキャラですがそれ以外のオリキャラは基本的にださないつもりです。ある程度でてくると思います。主人公のデッキはHEROデッキです。なのでシンクロは使いません。ただ物語が進むと使うかもしれません。

素人文章で読みにくいと思いますが読んでいただけると幸せです。

第1話 転生！5D'sの世界へ！（前書き）

はじめまして。龍南と申します。自信はありませんが読んでいただけたら幸いです。

第1話 転生！5D'sの世界へ！

?????side

「・・・ん、ここは？」

目をあけてみたら見慣れない天井があった。ってあれ？俺死んだんじゃないかったっけ？

その時、

「あっ・・・気がついたのね。」

つと声が聞こえた。そこには前髪を結んだ少女がいた。ってこの娘見覚えがあるぞ。って

「（この娘5D'sの主要キャラの龍可じゃん！）」

え！？どういうこと？じゃあここは5D'sの世界！？

「どうしたの？」

「え・・・あ、ここはどっ？」

「ここはトップスの最上階よ。あなた玄関の前で倒れてたのよ。」

やっぱり。ここはネオ童実野シティ。そして俺は5D'sの世界に転生されたということか。理由はよくわからないがそれはそれでうれしいな。

「あ、自己紹介がまだだったわね。私は龍可よ。よろしくね。」

「こちらこそよろしく。俺は……。」

「こっちの世界じゃ名前は何だろう？」

「どうしたの？」

「……ねえ、何か荷物なかった？」

「ああ、ここにあるよ。」

ということで荷物をみてみた。ってほとんどカードじゃん！

ええっと名前がわかるものはないかな……あった。これはI
Dカード？まあいいや名前は……。

「えっとこっちの世界でも名前は変わってないんだ。」

「こっちの世界？」

「あ……。」

やばっ、つい声にだして言っちゃった。どうしよう……。

「あー。起きてたんだ。」

ん？男の子の声？この声おそろくは。

「あ、俺は龍亞。龍可とは双子なんだ。」

「俺は山岸馱。よろしく。」

「ところでこっちの世界って?」

「こっちの世界?」

「うん。この人が言ってたから。」

隠し通すことはできなさそうだな。諦めて話そう。けど信じてもらえるかな。

「こっちの世界とはこことは違う世界のことだよ。」

「「こことは違う世界?」」

それから俺がこの世界に来た前のことを2人に話した。

ここで、読者のみなさんにも俺のことを話そうと思う。

俺は現実世界では17歳の高校生3年生だ。こっちでは12歳になっているが。でもただの高3じゃない。俺はハッカーだ。正義のね。中2ぐらいからやりはじめていろいろなところにハッキングした。ある日、変なサイトをみつけてハッキングしてみたらテロの計画表見たいなものを見つけた。やばいと思ってテロ対策の警察で仕事をしていた父さんに話した。最初はハッキングしていたことにこっぴどくしかられたけど、その資料のおかげでテロは未然に防ぐことが

できた。だが、そのせいで俺はテロリストに狙われるようになった。そして、そのテロリストは俺の学校を襲ってきた。そこで撃たれ死んだ……はずだった。で、気が付いたらここにおいて、冒頭のような状況なわけだ。

2人はかなり驚いていた。まあそうだろうな。普通ならありえないもんな。

「それって本当のことだよな。」

「そうだよ。この状況で嘘ついても仕方ないでしょ。まあ信じてもらえなくてもいいけど。」

「私は信じるわ。」

え……？

「なんで信じてもらえるの？」

「だってカードの精霊が良い人だって言ってるから。」

カードの精霊か。そういえば龍可は精霊が見えるんだっただな。ってあれ……？

「信じてもらえないと思うけど私はカードの精霊が見えるの。」

「ああ、龍可の後ろにいるクリボンのこと？」

「え？あなたクリボンが見えるの？」

俺もびつくりだよ。精霊が見えるなんて。それにしても龍可は嬉しそうだな。

「ねえ、駆はデュエルするの?」

「ああ、一応するよ。」

「じゃあデュエルしようよ。いつつも龍可ばかりでつまんないからさ。」

「失礼しちゃう。龍可だって弱いじゃん。」

あはは、仲がいいなこの2人。さすが双子だな。さて、デッキはあるかな。……ないか。このカードの山から作れってことか。

「こつちの世界にきたばかりでデッキがないからデッキつくったらいいよ。」

「本当?じゃあ早く作ろう。」

「ちょっと待って龍可。まず荷物の整理とかさせて。」

原作と変わらず元気だなあ龍可は。

『クリクリー』

ん?今なんか声が出たような。って

「まさかハネクリボー?」

『クリクリー』

まさかハネクリボーが俺の精霊とは……。俺は十代か！

「そのハネクリボーが駆の精霊？」

龍可も気づいたか。

「たぶんそうだと思う。」

「かわいいなあ。」

本当にうれしそうだな。

「そういえばさっきの話を聞く限りなら駆は住むところあるの？」

「あ……。」

すっかり忘れてたよ。てか俺の住むところなんてあるのか？

「どっしょ？」

「だったらここに居てよ。」

「え……？」

それは助かる話だけど。

「いいの？」

「もちろんよ。ねえ龍亞。」

「うん。大歓迎だよ。」

「じゃあ両親は？」

「私達の両親は今仕事で出かけていて帰ってこないの。だから心配しなくていいわ。」

これも原作通りか。

「だったらお言葉にあまえさせてもらおうかな。」

「よかった。これからよろしくね。」

「うん。」

「準備はいい？」

「いつでもいいよ。」

あの後荷物整理をしてからデッキを組み、これから庭で龍亞とのデュエルだ。

「じゃあいくよ。」

「「決闘!」「」

第1話 転生！5D'sの世界へ！（後書き）

読んでくれた方ありがとうございます。

つぎは駆と龍亞のデュエルです。

これからがんばりますので続きも読んでくれたら嬉しいです。

主人公設定

名前：山岸 駆

年齢：12歳（中1）

身長：龍亞よりちょっと上

外見：ドラゴンボールの孫悟飯みたいな感じ

備考：この小説の主人公。現実世界でのテロにより死んだはずが、いつのまにか5D'sの世界に転生されていた。今は龍亞、龍可の家に居候させてもらっている。現実世界でいじめられていたのでいじめは極端に嫌う。カードの精霊が見える。現実世界で長男だったためが面倒見がよい。性格は真面目で頭が良い。特技はハッキング。使用デッキはE・HEROにハネクリボーが入ったいわゆる十代みtainなデッキ。ただ漫画版ででてきたM・HERO、V・HEROの融合モンスターも使う。

主人公設定（後書き）

主人公の設定はこんなかんじです。

第2話 駆の初デュエル！vs龍亞（前書き）

予告通り駆vs龍亞です。

デュエルシーンを描くのは初めてなので、いたらないところがあると思いますが、よろしく願います。

あと、お気に入り登録してくださったみなさんありがとうございます。これからもよろしく願います。

では、本文をどうぞ。

第2話 駆の初デュエル！vs龍亞

駆 Side

「決闘！」

駆 LP4000

龍亞 LP4000

「俺のターン、ドロー！シャッキーン！」

先行はとられたか。それにしても楽しそうだなあ。

「俺はD・ラジカツセンを攻撃表示で召喚！チャッキーン！」

ATK/1200

「俺はカードを一枚伏せてターンエンド。さあ、駆のターンだよ。」

「ああ、俺のターン、ドロー。」

さあて、いきますか。

「手札から融合を発動。」

「いきなり！？」

そんなに驚くことかな？

「手札のフェザーマンとバーストレディを融合。」

フェザーマンとバーストレディが渦に吸い込まれる。

「E・HEROフレイム・ウィングマンを融合召喚。」

ATK / 2100

「さらにE・HEROザ・ヒートを召喚。」

ATK / 1600

「ザ・ヒートは自分フィールド上に表側表示で存在するE・HEROと名のついたモンスターの数×200ポイント攻撃力がアップする。」

ATK / 1600 2000

「いきなり攻撃力が2000と2100のモンスター!？」

「すごい……。」

「バトル!フレイム・ウィングマンでラジカッセンを攻撃。」

「待つてました!罨カードオープン。ディフォーム!」

ラジカッセンが守備表示になり、フレイム・ウィングマンの攻撃がはじかれた。

「ディフォームは自分フィールド上のディフォーマーが攻撃対象に

なった時、攻撃モンスター1体の攻撃を無効にして攻撃対象に選択されたディフォーマーの表示形式を変更するんだ。」

ATK / 1200 DEF / 400

「だったらザ・ヒートでラジカッセンに攻撃！」

「D・ラジカッセンの効果発動！ラジカッセンが守備表示のとき、自分フィールド上のディフォーマーが攻撃対象に選択された時、1ターンに1度だけ戦闘を無効にできるんだ。」

そういえばそんな効果あったなあ。

「カードを1枚伏せてターンエンド。」

「よし、俺のターン、ドロー！俺はD・モバホンを召喚。」

ATK / 1000

「モバホンは攻撃表示のときダイヤルの1〜6で止まった数字の分だけデッキからカードをめくり、その中にレベル4以下のディフォーマーがいたら特殊召喚できるんだ。ダイヤル〜オン！」

モバホンのダイヤルは3で止まった。

「3枚の中には・・・あった。俺はD・ラジオンを召喚。」

ATK / 1000

やっぱりなモンスターがきたな。

「ラジオンが攻撃表示のとき、ラジオンがフィールド上に表側表示
している限り、自分フィールド上のディフォーマーの攻撃力は800
ポイントアップするんだ。」

ATK / 1000 900

ATK / 1000 1800

「さらにラジカッセンを攻撃表示に変更。」

DEF / 400 ATK / 1200 2000

「さらに手札から装備魔法黒いペンダントをラジオンに装備。この
装備魔法の効果でラジオンの攻撃力はさらに500ポイントアップ。」

ATK / 1800 2300

「まずいなこの状況は。」

「バトル！ラジオンでフレイム・ウィングマンに攻撃！」

「くっ！」

駆 LP4000 3800

「でもただじゃやられない。罨カードヒーローシグナルを発動。自
分のモンスターが戦闘で破壊されたとき、デッキまたは手札からL
V4以下のE・HEROを特殊召喚できる。俺はデッキからE・H
EROFォレストマンを守備表示で召喚。」

DEF / 2000

「ちえっ、これじゃ残りのモンスターは倒せないじゃん。俺はこれでターンエンドだよ。」

この状況はまずいねえ。はやくなんとかしないと。

「俺のターン、スタンバイフェイズにフォレストマンの効果発動。デッキまたは墓地から融合のカードを1枚手札に加える。俺はデッキから融合を手札に加える。」

とはいえここは耐えるしかないね。モバホンだけでも倒しておくか。

「バトル、ザ・ヒートでモバホンに攻撃。」

「うあっ!」

龍亞 LP 4000 2900

「カードを1枚伏せてターンエンド。」

「俺のターン!俺はD・ボードンを召喚。」

ATK / 500 1300

「ボードンが攻撃表示のとき自分フィールド上のディフォーマーは相手プレイヤーに直接攻撃ができる。」

まずい、これで全部のモンスターの攻撃を受けたら俺の負けだ。

「バトル！ラジオンでダイレクトアタック！」

でも……。

「迂闊だよ、龍亞。リバースカードオープン。聖なるバリアミラーフォース！これで龍亞のモンスターは全滅だよ。」

「うわっ。」

ラジオンの攻撃はミラーフォースにはじかれて龍亞のモンスターは全滅した。

「う……、俺はカードを1枚伏せてターンエンド。」

「俺のターン、スタンバイフェイズ時フォレストマンの効果でデッキから融合を手札に加える。」

このターンで決めれるかな。あのリバースカード次第だね。除去するカードはないし。

「手札から融合回収を発動。墓地のバーストレディと融合を手札に戻す。そしてバーストレディを召喚。」

ATK / 1200

「E・HEROと名のついたモンスターが増えたことによりザ・ヒートの攻撃力がさらにアップ。」

ATK / 2000 2200

「バトル。ザ・ヒートでダイレクトアタック。」

「畏カードオープン攻撃の無力化！戦闘を無効にしバトルフェイズを終了させるよ。」

防がれたか。そうこなくちゃ。

「カードを1枚伏せてターンエンド。」

「俺のターン、ドロー……きた〜！俺はD・スコープンを召喚！」

ATK / 800

「スコープンが攻撃表示のとき1ターンに1度手札からLV4以下のデIFOーマーを特殊召喚できるんだ。俺は手札からD・ビデオンを特殊召喚！」

ATK / 1000

「俺はLV4のビデオンにLV3のスコープンをチューニング！」

来るね、龍亞のエースモンスターが。

「世界の平和を守るため、勇気と力をドッキング！シンクロ召喚！愛と正義の使者パワー・ツール・ドラゴン！」

ATK / 2300

遂にでてきたか。

「パワー・ツール・ドラゴンの効果発動！1ターンに1度装備魔法を1枚ランダムに手札に加えることができるんだ。パワーサーチ！」

デュエルディスクがランダムにカードを1枚選び出す。

「きたー！俺は装備魔法ダブルツールD&Cをパワーツールドラゴンに装備！このカードは自分のターンのみ装備モンスターの攻撃力を1000ポイントアップされる。」

ATK/2300 3300

「バトル！パワー・ツール・ドラゴンでザ・ヒートに攻撃！この時ダブルツールD&Cの効果も発動！装備モンスターが攻撃する時、攻撃対象モンスターの効果は無効化される。」

「な！」

ATK/2200 1600

「クラフティブレイク！」

駆 LP3800 2100

「どつだ！これでも俺の勝ちじゃん！」

「龍亞調子のりすぎ。とにかくターンエンド？」

「うん、エンドエンド。」

パワーツールドラゴン ATK / 3300 2300

「じゃあいくよ。俺のターン、ドロー。」

よし！このターンで終わらせる。

「俺は手札から融合を発動！場のフォレストマンと手札のバブルマ
ンを融合、E・HEROアブソルトZeroを融合召喚。」

ATK / 2500

「攻撃力2500!?!」

「バトル！Zeroでパワーツールに攻撃。フリージングアッドモ
ーメント!」

龍亞 LP 2900 2700

「くっ！でもパワーツールドラゴンは装備された装備魔法を墓地に
送ることで破壊をまぬがれる。」

「でもこれでパワーツールに装備されている装備魔法はなくなった
！リバースカードオープン！速攻魔法マスクチェンジ。」

「マスクチェンジ?」

「マスクチェンジは自分フィールド上のHEROと名のついたモン
スターを墓地に送り、墓地に送ったモンスターと同じ属性のM・H

EROと名のついたモンスターを1体エクストラデッキから特殊召喚する。あらわれるM・HEROヴェイパー！」

ATK/2400

「さらに墓地に送ったアブソルートZeroの効果！Zeroがフィールド上を離れた時、相手フィールド上のモンスターをすべて破壊する。」

「あ！パワーツールドラゴンが。」

「これで龍亞のフィールド上には何も無い。ヴェイパーとバーストレディでダイレクトアタック！」

「うわぁぁー！」

龍亞 LPO

ふう〜、危なかった。良かった勝てて。

「うう、負けちゃった。」

「でも、龍亞も強いじゃん。まだまだ強くなれると思っよ。」

「本当！？よし！もっと強くなっていつか駆を倒してやる！」

「もう龍亞ったら。でも駆強いよね。」

「龍可もやる？」

俺とすれば龍可がどんなデッキか見てみたいんだよね。

「ん〜、普段はあんまりやらないけど今日はやるわ。」

「じゃあ、早速やろつか。」

「うん。」

こうして双子との2連戦2試合目vs龍可が幕をあける。

第2話 駆の初デュエル！vs龍亞（後書き）

どうだったでしょうか。

次は駆vs龍可です。龍可のデッキどうしよう・・・。

では、更新頑張ります。何か間違いがあったら教えてください。感想も待っています。

第3話 天才少女の実力（前書き）

予告通り駆vs 龍可です。

龍可のデッキが原作とは違うのでご注意ください。

それでは本文をどうぞ。

第3話 天才少女の実力

駆 side

「決闘！」

駆 LP4000

龍可 LP4000

龍可との決闘から数分後、俺が龍可とやりたいということもあり今から龍可との決闘です。ありゃ、今回は俺が先行ですか。

「俺のターン！」

さて、龍可のデッキがどういうデッキかわからない以上このターンは様子見だな。

「E・HEROワイルドマンを守備表示で召喚。」

野蛮人みたいな男が現れ、守備態勢になった。

DEF / 1600

「カードを1枚伏せてターンエンド。」

「私のターン。」

さあ、どんな戦術でくる。

「私はフィールド魔法古の森を発動するわ。ここで争うことは許されない！」

あたりがいつきに森に変化した。

「古の森の効果でワイルドマンは攻撃表示になるわ。」

DEF / 1600 ATK / 1500

「私はマシユマロンを守備表示で召喚するわ。」

DEF / 500

戦闘で破壊されないモンスターか。やっかいだな。

「カードを3枚伏せてターンエンド。」

いきなり3枚も伏せたか。何を仕掛けてるんだか。

「俺のターン。」

ここは迂闊に攻撃はできない。守りに専念しよう。

「E・HEROクレイマンを守備表示で召喚。」

いかにも頑丈そうなヒーローが現れた。

DEF / 2000

「そしてワイルドマンを守備表示に変更。」

ATK / 1500 DEF / 1600

「これでターンエンド。」

「エンドフェイズに永続罫シモツチの副作用を発動するわ。」

「あ、あのカードは。」

「私のターン、私は手札から魔法カードソウルテイカーを発動するわ。このカードは相手モンスター1体を破壊し、相手は1000ポイント回復するカードよ。でも回復する効果はシモツチの副作用で逆になる。私はクレイマンを破壊するわ。」

クレイマンが破壊された・・・。

駆 LP4000 3000

「さらに魔法カード成金ゴブリンを発動するわ。私はカードを1枚ドロし、相手は1000ポイント回復する。けど・・・。」

「わかってる。言わなくていい。」

駆 LP3000 2000

「私はこれでターンを終了するわ。」

「俺のターン。」

よし！いいカードを引いた。

「俺は速攻魔法サイクロンを発動。シモツチの副作用を破壊！」

「そんな。」

まだ3枚伏せられてるけどここは攻める！

「手札から魔法カード戦士の生還を発動。墓地の戦士族モンスター1体を手札に加える。俺はクレイマンを手札に加える。そして融合を発動。手札のクレイマンとスパークマンを融合しE・HEROサンダージャイアントを融合召喚。」

雷を身にまとったHEROが現れた。

ATK/2400

「サンダージャイアントの効果発動。1ターンに1度手札を1枚捨てることで元々の攻撃力がこのカードの攻撃力より低いモンスター1体を破壊する。俺はマシユマロンを破壊する。」

「きゃあ。」

これで龍可の場にモンスターはいなくなった。伏せカードが気になるし古の森もあるけどここは・・・。

「ワイルドマンを攻撃表示に変更。」

DEF/1600 ATK/1500

「バトル！サンダージャイアントでダイレクトアタック。ボルテッ

クサンダー！」

「リバーズカードオープン、攻撃の無力化。」

やっぱりそう簡単にとおさせてはくれないか。

「俺はこれでターンエンド。」

「私のターン、手札から魔法カード天空の宝札を発動。手札から天使族・光属性モンスターを除外してカードを2枚ドロウする。私は手札の大天使クリスティアを除外し2枚ドロウするわ。」

クリスティア！？まさか龍可のデッキってシモッチバーンと天使が組み合わさってるデッキ！？たちが悪すぎるよ。

「私はコーリング・ノヴァを守備表示で召喚。そしてフィールド魔法天空の聖域を発動。これでターンエンド。」

森が消え、変な城が現れた。

DEF/800

「俺のターン。」

サンダージャイアントの効果でコーリング・ノヴァを破壊したいところだが、この手札は使いたくない。しょうがないか。

「バトル！ワイルドマンでコーリング・ノヴァを攻撃。ワイルドスラッシュ！」

ワイルドマンがコーリング・ノヴァを切り裂いた。

「コーリング・ノヴァの効果で英知の代行者マーキュリーを特殊召喚。」

DEF / 1700

なんだこいつは？ともかく何故このタイミングでだした？まだサンダージャイアントの攻撃が残ってるのに。

「サンダージャイアントでマーキュリーに攻撃。ボルテックサンダー！」

「罨カード炸裂装甲を発動するわ。」

「げ、サンダージャイアントが。」

サンダージャイアントが破壊された。ワイルドマンだけじゃ次のターンまでもつかわからない。仕方がないこの手札はまだ使いたくなかったけど。

「手札からミラクルフュージョンを発動。墓地のクレイマンとスパークマンを除外し融合！E・HEROTH シャイニングを融合召喚！」

説明しにくい光のヒーローが現れた。

ATK / 2600

シャイニングの攻撃力は除外されているE・HEROの数1体につ

き300ポイント攻撃力がアップする。除外されているE・HER
Oは2体。よって攻撃力が600ぽいんとアップ!」

ATK/2600 3200

「これでターンを終了する。」

「私のターン。」

これなら持ちこたえられるはず。

「スタンバイフェイズにマーキュリーの効果発動。相手のエンドフ
ェイズに手札が0枚だった場合、カードをさらに1枚ドロウする。」

なっ、あいつってそんな効果持ってたの!?

「マーキュリーを生贄に天空騎士パーシアスをアドバンス召喚。」

天使か騎士かわからないやつがでてきた。

「バトル、パーシアスでシャイニングに攻撃。」

え?パーシアスより攻撃力の高いシャイニングに攻撃!?まさか手
札にあれが……。

「ダメージステップに手札からオネストを捨てパーシアスの攻撃力
をシャイニングの攻撃力分アップさせます。」

やっぱり。

ATK / 1900 5100

駆 LP2000 100

「畏カードオープンヒーローシグナル。モンスターが戦闘によって破壊されたときデッキからLv4以下のE・HEROを特殊召喚できる。俺はE・HEROフォレストマンを守備表示で特殊召喚。」

体半分が木になっている男が現れた。

DEF / 2000

「さらにシャイニングの効果発動。このカードがフィールド上から墓地に送られた時、除外されているE・HEROを2体まで手札に加えることができる。俺はクレイマンとスパークマンを手札に加える。」

「私もパーシアスの効果発動。このカードが戦闘ダメージを与えたときカードを1枚ドロウする。これでターンを終了するわ。」

まずい。俺のライフはあと100。たいして龍可のライフは4000のまま。こっから逆転できるのか？でも、やるしかない。

「俺のターン！」

よし！これなら。

「スタンバイフェイズにフォレストマンの効果発動。デッキから融合を手札に加える。そして融合を発動。手札のクレイマンとネクロダークマンを融合。E・HEROエスクリダオを融合召喚。」

今度は闇を身にまとったHEROが現れた。

ATK / 2500

「エスクリダオの攻撃力は墓地のE・HERO1体につき100ポイント攻撃力がアップする。墓地のE・HEROは4体よって40ポイント攻撃力がアップする。」

ATK / 2500 2900

「畏カードオープン激流葬。」

「なっ。」

フィールド上のモンスターがすべて流されていった。

「くそっ、なら俺はE・HEROスパークマンを召喚。」

なんとも説明しづらい光のHEROが現れた。

ATK / 1600

「バトル！スパークマンでダイレクトアタック。スパークフラッシュ
ユ！」

「きゃあ。」

龍可 LP 4000 2400

やっと龍可のライフを削れた。でも次のターンを耐えられるかな。

「俺はこれでターンを終了する。」

「私のターン。私は次元合成師を召喚。」

銀色の服を身にまとった男が現れた。

ATK / 1300

「次元合成師の効果発動。1ターンに1度デッキの1番上のカードを除外し、攻撃力をエンドフェイズまで500ポイントアップさせる。」

ATK / 1300 1800

「バトル、次元合成師でスパークマンを攻撃。」

駆 LP 1000

負けたか、さすがは天才少女ってところかな。

「強いね龍可。」

「ありがとう。そういう駆も強いね。」

「そう？今のデュエル龍可が主導権握りっぱなしのうえにダメージ与えたのが最後のダイレクトアタックのみだったんだよ。」

「でも、エスクリダオを召喚されたときは正直あせったわ。激流葬

「がなければ負けてたもん。でも楽しかった。」

「俺も楽しかった。またしてくれる？」

「喜んで。」

「その前に俺もしたい！」

「龍亞もまたやろうね。」

「うん。」

「じゃあそろそろお昼にしましょう。」

「そうだね、腹もへってきたし。」

こうしてこの世界での生活が始まった。しかし、龍可が原作より強いのは気のせいかな？

第3話 天才少女の実力（後書き）

いかがでしたか。龍可の口調に自信がないんですが……。

龍可が一応メインヒロインなのでもうちょっと強くしようといこうとで変えてみました。

でもちょっと強くなりすぎたような気がします。

それでは何かいたらないことがありましたらご指摘お願いします。感想も待っています。

第4話 大会準備 原作崩壊！？（前書き）

今回はデュエルはありません。そしていろいろと話が飛びます。

それではどうぞ。

第4話 大会準備 原作崩壊!?

馭side

この世界に来てから1カ月がたった。その間、たった2日だけだったけど龍可たちの両親が帰ってきた。両親は最初は驚いてたけど、すぐに認めてもらえた。つまりここに住んでもいいことになった。理由としては2人がなついているからと、龍可たちの話を聞く限り悪そうじゃないかららしい。その代わりに2人の世話係を頼まれた。俺とすれば住めるところがあるだけで十分なので快く引き受けた。

そして今は龍可と2人で家にいる。龍亞は友達の手兵という人と一緒に遊びに行っている。で、龍可とデュエルしているのだが。

「はあ、また負けた。」

そう。龍可が強いです。今まで11勝20敗と大きく負け越しているんです。だってクリステアだされたら融合が使えなくなるので相性が悪いんです。ちなみに龍亞との対戦は13勝2敗と大きく勝ち越している。そして龍可と龍亞の対戦は俺が見た限りでは龍可の8戦全勝といっつも龍可が勝っている。

「でも激戦だったじゃない。」

「あはは、でも楽しかった。」

「私も、馭とやるとすっごく楽しい。」

龍可に笑顔がこぼれる。そういえば原作で龍可のこんな顔あんまり見てないなあ。

「5時か。そろそろご飯つくらなきゃ。」

「あ、今日は私も手伝うわ。」

ご飯はたいてい俺が作るけど、龍可も今日みたいに手伝ってくれたり1人で作ることもある。龍可も料理がうまいからね。

そうしてご飯が出来上がったころ龍可が帰ってきた。

「ただいま〜。2人に手紙が届いてるよ。なんかの大会の招待状みたいけど。」

「え?」

俺にも?おそらくはあの大会のことだろうけど。手紙を開いてみると案の定。

「「フォーチュン・カップ?」」

フォーチュン・カップの招待状だった。龍可はともかくどうして俺にまできてるんだろう。ま、参加するけどね。

「優勝者はキングと対戦できるんだ〜。いいなあ。おれもでたい!」

残念ながら龍可は招待されてないんだよね。でもおそらく……。

「駄目よ龍可。これは私と駆に来てるんだから。」

「え？もしかして龍可出るの？」

「うん。たまには参加してもいいかなって。それに駆と一緒にだし。」
あれ、龍可が出る気まんまんだし。完全に原作崩壊してない？それ
も絶対俺のせいだよ。

「駆もちろんでるよね。」

「あ、うん。」

「ちえつ。まあいいや。2人とも頑張ってる。俺応援するから。」

「うん。それよりご飯食べよ。さめちゃうよ。」

「そうね。」

それから晩飯を食って1人ずつ風呂に入ってしばらくして寝る……
はずだった。

ガッシャーン！

「何か今変な音しなかった？」

「うん。」

「行ってみる？」

「そうだね。」

俺たちは音のした方へ向かった。あれ？これってもしかして……

「あそこに誰か倒れてるよ。」

うん、どう見ても原作主人公の遊星です。ということは原作開始か。

「意識がないな。」

「どうする？」

「とりあえず俺たちの家に運ぼう。」

「そうだね。」

それから遊星と遊星が乗っていたDホイールを運んだ。それから遊星は明日には目を覚ますだろうということそのまま寝た。

次の日、遊星は起きそのまま俺がいるってこと以外ほとんど原作通りに進んだ。

(詳しくは5D's 13話を見てください。)

それから数日がたち、

「今日がフォーチュン・カップ開催の日だね。」

「うん。」

「準備はいい？」

「いいわよ。」

「じゃあ行きますか。」

「うん。」

ということで途中遊星たちと合流し、大会が開催されるスタジアムへ向かい開会式の準備をしている。

今はスタジアムの地下で大会に出る俺と龍可、遊星と待機中だ。

「しかし緊張するな。こんな大舞台でデュエルするの初めてだし。」

「私も久しぶりだから緊張する。」

前の世界じゃこんな大勢人がいる前でデュエルとかなかったもんなあ。

「俺は楽しみだな。2人がどんなデッキを使うのか。」

さすが遊星だな。こんなときに緊張すらしてない。

「そろそろだな。」

それから開会式がおこなわれた。この後、1回戦のカードが発表されたんだが、

第1試合 山岸駆VSエックス

第2試合 不動遊星VSボマー

第3試合 十六夜アキvs来宮虎堂

第4試合 龍可vsフランク

原作からかなり変わってるな。だいたい俺の対戦相手のエックスって誰？聞いたことないぞ。そして龍可はいきなりフランク戦、そして遊星とアキは原作では準決勝で当たる相手じゃん。どんだけ変わってるんだよ。

「駆は第1試合だね。頑張って。」

「うん。頑張るよ。」

こうしてフォーチュン・カップが開幕した。

第4話 大会準備 原作崩壊！？（後書き）

どうでしたか？

今回は駆 vs エックスです。

それではご指摘やご感想お待ちしております。

第5話 HEROの絆 テッキ破壊を打ち破れ！(前書き)

今回は駆VSエックスです。

すでに予想してた方もいましたがエックスはGXでできたあのエックスです。テッキは少々異なるうえに口調がおかしいと思います
がご了承ください。

ではどしどし。

第5話 HEROの絆 デッキ破壊を打ち破れ！

龍可side

「デッキ破壊？」

私は今控室にいる。隣で駆が開幕戦のデュエルの準備をしている。近くには遊星と氷室さんがいる。あ、氷室さんは遊星の仲間ね。そして氷室さんが俺の対戦相手のことを話しているところよ。

「ああ。奴はデッキ破壊で、しかも奴とデュエルした人はデュエルをする気力を失うという噂を聞いたことがある。どちらにしるやっかない相手だな。」

デッキ破壊かあ。嫌な相手ね。

「はあ、面倒な相手だな。」

「だが、相手は元プロだ。気を引き締めてかかれよ。」

「うん。情報ありがとう氷室さん。」

「ああ。お前のデュエル楽しみにしている。じゃあ俺は客席で見ている。頑張れよ。」

そう言って氷室さんは客席に行った。

「さあていきますか。」

「頑張つてね。」

「うん。」

「・・・大丈夫かな駆。」

「さあな。でも俺も駆のデュエルは楽しみだ。」

頑張つて。駆。

駆side

俺は今スタジアムの地下でコールされるのを待っている。

しかし相手はデツキ破壊か・・・面倒だな。ん？デツキ破壊のエックス？アニメで聞いたことがあるようなないような。気のせいか。

(実際にGXででてます。詳しくはGX第72話を見てください。)

MCがなんごちゃごちゃ言ってるからそろそろ出番かな。

「さあ、このフォーチュン・カップの記念すべき開幕戦を戦う2人のデュエリストを紹介しよう。まず1人目は年齢はまだ12歳。ゴドウィン長官から直々に選ばれたその実力はどれほどのものか？！
？、山岸駆〜！」

いやいや、全員ゴドウィンが選んだんじゃないのか？まあいいや。コールを受けて俺はデュエルフィールドへと向かう。

しかしこんな大勢の観客の目の前でデュエルするの！？緊張するなあ。

「対する2人目のデュエリストは恐怖のデッキデス使い、エックス」
「！」

MCのコールにエックスという人も上がってきた。

「君が駆くんか。悪いけどこのデュエルが終わった後あなたは2度とデュエルできなくなる。精々最後のデュエルを楽しむんだな。」

いきなり何言ってるんだこいつ。そういえば氷室さんが言ってたなあ。こいつとデュエルした人はデュエルする気力を失うって。でもそう簡単に気力って失われるものなのか？まあいいや。

「そう簡単には負けませんよ。」

「ほざけ。」

「さあ開幕戦の始まりだ！」

さあいくぜ！

「決闘！」

駆 LP4000

エックス LP4000

「先行は私だドロー！」

ついに始まった。

「私はモンスターを裏側守備表示でセット。さらにカードを4枚伏せてターンエンド。」

いきなり4枚も伏せやがったよ。まあ、デッキ破壊なら無理ないか。

「俺のターン、ドロー。」

でも4枚も伏せるか？もしかしてあのモンスターはメタモルポットか？なんにしるデッキ破壊に長期戦は禁物。ここは攻めるぜ。

「俺は手札から融合を発動。手札のフェザーマンとバーストレディを融合。E・HEROフレイム・ウィングマンを融合召喚！」

GXでおなじみの十代の初期のフェイバリットが登場した。

ATK / 2100

「さらにカードを2枚伏せる。バトル！フレイムウィングマンで裏守備モンスターを攻撃。フレイムシユート！」

出てきたモンスターはメタモルポットだった。予想大当たりかよ。

DEF / 600

龍の顔みたいなどころからでた炎がメタモルを焼き尽くした。ってお前風属性だよな。なんで炎だしてんだよ。

「フレイム・ウィングマンの効果発動。戦闘で相手モンスターを破壊した時、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを受ける。」

「くっ。」

エックス LP4000 3300

「だがメタモルポットの効果発動。お互いの手札をすべて捨て、その後お互いにカードを5枚ドローする。」

「俺はさらにカードを2枚伏せてターンエンドだ。」

何気に俺もカード4枚伏せてるし。まあいつか。

「私のターン、私は手札断札を発動。お互いに手札からカードを2枚捨て、2枚ドローする。」

手札交換カードか。妥当だな。

「さらに私は二重召喚を発動。このターン私は2回通常召喚できる。私は2体モンスターをセットさらに魔法カード手札抹殺を発動。」

始まったな。デッキ破壊の真骨頂が。

「さらに伏せていた魔法カード太陽の書を発動。セットモンスターを表にする。セットモンスターはニードルワームだ。ニードルワームの効果で相手はデッキの上からカードを5枚墓地に送る。さあ、墓地に送ってもらおうか。」

ATK/750

くっ、わかってたけどデッキ破壊はすごい。超すごい。

「さらに墓地のADチェンジャーの効果発動。このカードを除外することでフィールド上のモンスターの表示形式を変更する。私はもう1体のセットモンスターを表にする。まあニードルワームだがね。」

またかよ。気持ち悪い。

「ニードルワームの効果発動。デッキの上から5枚墓地に送ってもらおうか。さらにリバースカード皆既日食を発動。フィールド上のモンスターをすべて裏側守備表示にする。」

「なっ。」

これってまだ続くパターン？やばくない？

「さらに墓地の2枚のADチェンジャーの効果発動。2枚のニードルワームを表に。ニードルワームの効果で10枚デッキの上から墓地に送ってもらおう。」

やばい！俺のデッキ枚数が。

「さらにリバースカード皆既日食！2枚のニードルワームを裏に。そして手札から2枚の太陽の書を発動。」

なっ。なんでそう都合よく手札にあるかなあ。それはともかく本当にやばい。

「2枚のニードルワームを表に。リバース効果でデッキからカードを10枚墓地に送ってもらおう。これでお前のデッキはすべてなくなった。さらにエンドフェイズに皆既日食のもう1つの効果を発動。」

相手フィールド上のモンスターをすべて表にし、表になったモンスターの数だけ相手はドローする。しかしお前のデッキは0だ。ドローできないから私の勝ちだ。どうだね、デッキをすべて墓地に送られた気分は？はっはっは。」

・・・なんか勝手に勝利宣言してるけど。

「ねえ。」

「うん？何だね？敗者はとっとと消えてほしいのだが。」

「勝手に勝った気分ですけど、まだ俺のデッキ2枚残ってますよ。」

「何！？まさかお前。」

「今の戦略40枚デッキが相手だと確かに終わりです。けど俺のデッキはあいにく46枚だったんですよ。」

「ちっ！まあいい。皆既日食の効果でカードをドローするからお前のデッキはのこり1枚。次のターンでお前は終わりだ。」

まだ勝った気分で見たい。決めた。こいつ潰す。完膚なきまで叩き潰してやる。

「次のターンがくれればいいですけどね。俺のターン！」

うわあ、最後に残ってたのこいつだったんだ。俺の勝つ確率が上がったな。

「俺は伏せていた魔法カードサイクロン発動。お前の残っている伏せカードを破壊する！」

伏せカードは攻撃の無力化だった。これで墓地で発動するモンスターがいないかぎり俺の勝ちだな。

「俺は墓地のネクロダークマンの効果を発動。このカードが墓地にあるとき、1度だけE・HEROを生贄なしで召喚することができる。俺は手札からE・HEROエツジマンを召喚。」

金色の体をしたモンスターが現れた。

ATK/2600

「さらに手札から融合を発動。手札のバブルマンとザ・ヒートを融合。E・HEROアブソルトZeroを融合召喚。」

氷をまとったヒーローが現れた。

ATK/2500

「さらに伏せカードオープン。ミラクルフュージョンを発動。」

「何だと！」

「このカードは場または墓地から融合素材を除外し融合召喚する。俺は墓地のクレイマンとエアーマンを除外し融合。E・HEROガイアを融合召喚。」

今度は土をまとったヒーローが現れた。

ATK / 2200

「ガイアの効果発動。このカードが融合召喚に成功したとき、相手フィールド上のモンスター1体の攻撃力を半分にし、ガイアの攻撃力をエンドフェイズまで下げた数値分アップする。」

ニードルワーム ATK / 750 375

ガイア ATK 2200 2575

うわあ。ガイアが凄い中途半端な数字に。でもまだまだいくよ。

「俺は伏せていた2枚目のミラクルフュージョンを発動。場のアップソルトZeroと墓地のスパークマンを除外し融合。E・HERO Theシャイニングを融合召喚。」

今度は光を身にまとったヒーローが現れた。

ATK / 2600

「Zeroの効果発動。このカードがフィールドを離れた時、相手フィールド上のモンスターをすべて破壊する。」

「何っ！」

「さらにシャイニングの攻撃力は除外されているE・HERO1体につき攻撃力が300ぽいんとアップする。除外されているE・HEROは4体。よって1200ポイント攻撃力アップ！」

ATK / 2600 3800

「さらに最後のリバースカードオープン。装備魔法団結の力をエツジマンに装備。」

ATK / 2600 5000

「3体で直接攻撃。」

「うわああああ。」

エックス LP 3300 0

「決まったーっ！残りデッキ枚数1枚からの逆転勝利！開幕戦を勝利したのは山岸駆だー！」

我ながらすごいオーバーキルだったな。総攻撃力11375、8075のオーバーキルだ。やりすぎたかな？

龍可 side

「凄い。」

私はそうつぶやいた。だって残りデッキ1枚からの逆転勝利よ。やっぱり駆は強いわ。

「そうだな。俺もあいつと対戦するのが楽しみになってきたな。」
隣で遊星がデュエルの準備をしている。そっか、次は遊星の番だったわね。遊星はDホイールを持っているからライディングデュエルになるのかな。

と、そこに控室の扉が開いて駆が入ってきた。

「お疲れ、駆。」

「うん。勝ってきたよ。」

「凄いね駆。あの状況から勝つなんて。」

「いやあ、あれはたまたま手札がよかったただけだよ。」

「それも駆のデッキが応えてくれたということだろう。」

「遊星……、うんそうかもね。」

絶対そうだと思う。駆がデッキを信じた結果だと私は思う。

「次は遊星の番だね。頑張ってるね。」

「ああ。そろそろ行ってくる。」

そう言っつて遊星は控室から出て行った。

「遊星のデュエル楽しみだね。」

「うん。」

なんか今からが楽しみだなあ。

第5話 HEROの絆 テッキ破壊を打ち破れ！（後書き）

いかがでしたか？

今回は第2、第3試合は飛ばして第4試合龍可vsフランクになる
と思います。

それと明日から本格的にテストが始まるので更新がちょっと止まる
と思います。

それではご指摘やご感想お待ちしております。

第6話 遊星とアキの戦い そして天才少女出陣！（前書き）

テスト期間中だというのに更新しました。

それではどうぞ。

第6話 遊星とアキの戦い そして天才少女出陣！

駆side

俺は今龍可と一緒に控室にいる。スタジアムでは第2試合遊星vsボマーの真つ最中だ。まあ、もう終わるがな。

「パワーギア・フィスト！」

「ぐおおお！」

ボマー LPO

「遂に決着！1回戦第2試合、この激戦を勝ち抜いたのはサテライトの流れ星、不動遊星だー！」

「遊星も勝ったわね。」

「うん。さすがだな。」

最後は本当にチートドロだったな。遊星の最後のターンを簡単に説明すると手札0、場がジャンク・シンクロンだけのときにチューニング・サポーターを引き召喚してシンクロ、アームズ・エイドを出す。チューニング・サポーターの効果でドロ、その引いたカードを使用してジャンク・ウォリアーを召喚。アームズエイドをジャンク・ウォリアーに装備して相手モンスターに攻撃。

流れはこんな感じだ。本当にチートドロですね。さすが主人公。

「遊星……、見事だった。私の完敗だ。」

「え？ボマーさんの声？」

始まったな。ボマーの復讐が。

「私は負けた。だが、私の使命は終わってはいない！」

「え！？」

みんな驚いてるね。

「私はこの大会に優勝し、式典でゴドウィンが行った事実を公にするつもりだった。だが、今になってはそれは叶わぬ夢・・・ならば、この場で復讐を果たすまで！」

「復讐？」

「これを見よ！無に帰した我が村を！」

モニターにとある村が写し出された。これがボマーの故郷・・・。

「これが私の村だ！故郷だ！ゴドウィンは赤き龍を復活させようと我が村を実験材料にした・・・。そして私の村は・・・。」

そこまで言った瞬間村が大爆発を起こし、村が一瞬にして焼け野原となった。ひどいな・・・。

「村人全員が行方不明。その中に私の姉弟もいた。」

「それじゃあ、お前の姉弟は・・・。」

「遊星、ジャック！奴を信じるな！ゴドウィンに赤き龍を渡してはならない！」

そう言つてボマーはDホイールに乗り、アクセルを回した。

「ボマー！？」

「奴とはこの俺が決着をつける！この悲しみを2度と繰り返さないために！」

ボマーはコースの傾斜を利用してゴドウィンのいるところへ飛んだ。このままいくとおもいきや、遊星が同じように飛びボマーと衝突した。

そしてあとには、

「あああああー！」

ボマーの叫び声が木霊するだけだった……。

その後、ボマーはセキュリティによつて連行され、スタジアムでは第3試合アキvs虎堂のデュエルが始まっていた。俺と龍可、それから遊星は控室で龍可のデッキ調整を手伝いながらその試合を見ていた。

のだが……。

「罨カードカース・オブ・ローズを発動。相手フィールド上に存在するモンスターの攻撃力が変化したとき、変化した数値分のダメージを相手に与える。・・・やれ。」

「ぐわああああ！」

虎堂 LPO

「決着！早く救護班を！」

「何今の！？」

龍可はびっくりしてるね。それもそうか、あんなものを見せられたらね。あ、アキのサイコパワーのことね。

「遊星。」

「何だ？」

「彼女のカードをどう見た？」

「拒絶と怒りと・・・、だがまだ何か潜んでいる。」

「そっか。」

アキとはあたりたくないなあ・・・。それはそうと次は龍可の番。原作とは大きくデッキが異なる龍可だけど、フランク相手にどう戦うかな？それとも原作通りになってしまうのかな。

「次は龍可だね。頑張れ！」

「自分のデッキを信じる。そうすればデッキはおのずと応えてくれる。」

「う、うん。わかった。頑張る。」

そう言っつて龍可は控室を出た。

「龍可大丈夫かな。」

「まだ小学生だからな。緊張するのは当然だろう。それより龍可のデッキはどういうデッキなんだ？」

「基本的には天使デッキだよ。ちょっとシモツチバーンがはいつてるけど、すつごく強いよ。」

「そうか楽しみだな。」

さあ、天才少女出陣！てか。

龍可 side

いよいよ私の番。駆も遊星も勝ったんだし、私も勝たなきゃ。・・・緊張するなあ。

「さあいよいよ1回戦もこれが最後の試合だー！第4試合、まず1人目は参加最年少、舞い降りたデュエルの天才少女、龍可ー！」

何か勝つてに名前がのばされてる・・・、しかも天才少女って・・・私そんなんじゃないのに。

と思いつつも私はデュエル場上がる。

「対するは、デュエルカウンセラーの異名を持つプロフェッサーランク！」

反対側から私の対戦相手ランクさんが出てきた。

「初めまして龍可さん。」

「は・・・はあ。」

「さあ、このデュエルであなたの深層意識に隠された本当のあなたを見つけましょう。」

な、なんなのこの人？なんか嫌な感じ。そんな気持ちの中、

「クリリン…。」

クリボン・・・あなたも嫌な感じがするのね。

私はデュエルディスクを起動させた。

「「決闘！」」

龍可 LP4000

ランク LP4000

このデュエルさつさと終わらせよう……。じゃないと嫌な予感がある。

「私のターン、ドロー、」

でも手札が悪い。ここは様子見しかない。

「私はシャインエンジェルを守備表示で召喚。」

頭に輪がある天使が現れた。

DEF / 800

「カードを1枚伏せてターン終了。」

「私のターンです。ドロー、私はシンメトリー・ロールシャツハを攻撃表示で召喚。」

蝶々のような像が現れる。

ATK / 1200

「あなたはロールシャツハテストというのはご存じですね。」

何それ……。

「このモンスターをどのように感じるかによってあなたの抱える心配、不安、問題を解き明かすための手掛かりを得るための心理テストです。さあ、龍可さん、あなたにはこのモンスターは何に見えますか？」

何なのこの人？そんなこといきなり言われても……。

「あなたは何に見えます？さあ答えてください。」

「何って……。」

「さあさあ、何に見えます？」

ていうかデュエル中にこんなことしてていいの？と思った瞬間シンメトリー・ロールシャツハが形を変え、シャインエンジェルのような形になった。

「よ、妖精？」

すると突然シンメトリー・ロールシャツハの顔が怖い顔になった。

「スパイラル・マインド」

オーラのような物が流れてきたと思えば、シャイン・エンジェルが破壊されていた。

「え？」

「フフフ……、これはあなたが心の奥底で恐れていたものを露わにするものだったのです。あなたは妖精や精霊を恐れている。違いますか？」

「そんなことは……。」

「いったい何なの？」

「大丈夫ですよ、このデュエルであなたが抱えていた悩みを解き明かし、解放してあげましょう。」

「だから何なの！？私に悩みなんて……。」

「そのためにも勇気を持ってあなたの深層意識に住むもう一つの世界……デュエルモンスターの精霊世界へと旅立っていくのです。」

「デュエルモンスターの精霊世界？」

「知っていますよ、あなたは精霊の言葉を感じることができる。」

「な！ど、どうしてそのことを。このことは龍亞と駆しか知らないはずなのに。」

「だったら、デュエルモンスターの精霊世界があつたって不思議じゃないでしょう。」

「そんな世界があるなんて……。」

「シンメトリー・ロールシャッハの効果発動。相手モンスターを破壊した時、相手のデッキの1番上のカードを表向きにすることができる。ピーピング・マインド。」

デッキの1番上のカードを表向きにする。でてきたのは、

「クリリン。」

クリボン……。あなただったのね。

「可愛い精霊のカードですね。もしや、その子の声も聞こえてるんじゃないですか？」

確かに私は精霊の声を聞くことができる。でも……。と、その前にやることが。

「シャインエンジェルの効果発動、シャインエンジェルが戦闘によって破壊され墓地に送られたとき、デッキから攻撃力1500以下の光属性モンスターを1体特殊召喚できる。私はマシユマロンを特殊召喚。」

ATK/300

何？なにかぼんやりとしてきた……。

「カードを2枚伏せてターンエンドです。あなたのターンですよ。」

「私の……ターン……。マシユマロンを守備表示に変更……。」

ATK/300 DEF/500

「クリボンを攻撃表示で召喚……。クリボン……来て……。」

ATK/300

「この瞬間、リバーズカードをオープン、深層へと導く光。相手はデッキから5枚カードを墓地に送り、6枚目のカードをお互いに確

認しあい、手札に加えます。このターン、そのカードをプレイしなかった場合、相手プレイヤーは2000ポイントのダメージを受けます。さあ、デッキからカードをめくって下さい。」

光・・・、私はぼんやりとしながらカードを引いていく。そして6枚目は・・・古の森だった。

「ほお・・・それはフィールド魔法、古の森ですか。全てのモンスターは攻撃表示となり、守備表示で召喚することも、守備表示に変更することも出来なくなる。攻撃を行ったモンスターはバトルフェイズ終了時に破壊される。フツフツ、全てをあからさまに、そして決して争う事を許さない世界、さあ・・・デュエルモンスターズの精霊世界へ。」

そして私の意識は精霊世界へと旅立った・・・。

第6話 遊星とアキの戦い そして天才少女出陣！（後書き）

どうでしたか？

遊星とアキのデュエルを詳しく見たい人はアニメ5D'sの第20話から第22話をご覧ください。

次回は龍可vsフランクの決着です。そして駆も精霊世界に？

ではご指摘やご感想お待ちしております。

第7話 精霊世界突入！ 龍可の怒り（前書き）

今回は龍可 vs フランクの決着です。

ではどうぞ。

第7話 精霊世界突入！ 龍可の怒り

馭side

龍可がフランクとデュエルを始めたばかりのころの控室。

ここには今俺と遊星しかない。

「ちよつといいか馭？」

「何？遊星。」

「さつきから気になったがああの2人がデュエルモンスターの精霊世界とか言っているがお前は何か知っているか？」

そのことか……。うん……。遊星になら言ってもいいかな。信頼できるし。」

「信じられないかもしれないけど龍可はデュエルモンスターの精霊が見えてるんだ。俺もだけど。」

「お前も？」

「うん。そしてその精霊たちが住んでいるのが精霊世界なんじゃないのかな。詳しくはまだ俺もわからないけど。」

「そうか……。」

困惑してるね。まあ無理ないか……。

『クリクリ〜。』

ん？ハネクリボー？

「どうしたの？ハネクリボー。」

「ハネクリボー？お前の言う精霊のことか？」

「うん。」

「そうか。俺には見えないが。」

そりゃそつだよな。普通の人には見えないからね。何故俺が見えるのかは疑問だが。

『クリクリー。』

ハネクリボーが指してるところを見ると、そこにはモニターが……つて、龍可の様子が変だ。デュエル中なのにぼーっとしてる。まさか……。

「まさか龍可が精霊世界に行っちゃった？」

『クリクリー。』

ハネクリボーが小さく頷いた。やっぱりか……。

「何があった？駆。」

「龍可の精神が精霊世界に行っちゃったらしい。」

「何っ!?!」

「どうしようか……。うん?もしかしたら。」

「ハネクリボー、もしかして俺も精霊世界に行ける?」

『クリクリー。』

「またも小さく頷いた。だったら。」

「遊星。」

「何だ?」

「遊星は龍可の様子を見に行ってくれない?俺は精霊世界に行つて龍可を助けてくる。」

「原作通りだったらちゃんと帰ってこれるけどこの大会はもうすでに原作なんて関係なくなってる。だから何が起こるか分からないからね。」

「できるのか?」

「多分大丈夫だと思う。」

「そうか。気をつけるよ。」

「うん。ありがとう。」

「じゃあ俺はフィールドに行ってくる。」

そう言っつて遊星は行つた。

「じゃあハネクリボー、精霊世界に案内して。」

『クリクリー』

そして俺の精神も精霊世界に流れて行つた。

「……ここは？」

目を開けてみるとそこは暗い街……っつてここはヒーローシティ！
？つてことは来たんだね。精霊世界に。

「ようこそヒーローシティへ。」

「え？」

後ろを振り返つてみるとそこにはフェザーマンとスパークマンがいた。

「よく来てくれましたマスター」

マスターって……。そこは置いといて。

「ねえ、俺龍可を探してるんだけど。どこにいるか知らない？」

「龍可？一緒に暮らしてる娘のことですか？」

「まあそうだね。」

「その娘でしたらおそらくは森のほうにいるんじゃないでしょうか。」

「やっぱり森のほうか。」

「俺達も一緒に行ってもいいでしょうか？」

「うん……、人数は多い方がいいかな。」

「いいよ。迷惑じゃなけりゃ。」

するとヒーローシティの向こうにある森が枯れ始めた……。

「まずいね。急いで行かなきゃ。行くよ。」

そう言っただけで俺とフェザーマンとスパークマン、そしてハネクリボーは森の方に走り始めた。

しばらく走ると人影が見えてきた。間違いない。龍可だ。それとフランク！？何であいつが！ってあいつも来るんだったな。赤き龍のせいだ。

「龍可！」

「駆……？どっしりして……」

「どうしてって助けに来たにきまつてるじゃん。」

「そうなんだ。ありがとう。」

「ほお、あなたも精霊が見えるんですね。駆くんだったかな。」

「そうだよ。あなた、いったい何を企んでるの？」

「私は何も企んじやいないよ。ただ、お前たちの、そして精霊世界の苦悶する表情を見ればそれでいいんだよ。」

「な！こいつ！」

「さあ、デュエルを再開しようか。お譲ちゃん。」

「な！この状況でデュエルを再開するだと！ふざけやがって！」

「大丈夫よ駆。」

「龍可……？」

「私がそんなことさせない！絶対にこの精霊世界を守ってみせる。私のターン！」

「ここでフィールドを整理しようか。」

龍可 LP 1200

手札 4枚

光神テテユス ATK / 2400

クリボン ATK/0
セットカード3枚

フランク LP3600
手札2枚

超魔神イド ATK/2200

永続罨 ゲシュタルト・トラップ（クリボンに装備）

装備魔法 不死のホメオスタシス（クリボンに装備）

永続魔法 悪意の波動

テテユスがもういるだと！本気だな龍可。

「テテユスの効果発動。ドロートしたカードが天使族だった場合、そのカードを相手に見せることでもう1枚カードをドロートすることができる。神聖なる魂を見せてドロート、ヘカテリスを見せてドロート」

ありやりや、思ったよりひかなかったね。

「だがこの瞬間不死のホメオスタシスの効果発動。クリボンの攻撃力が変わっていることにより300ポイントのダメージを受けてもらおう。」

龍可 LP1200 900

「手札から魔法カード癒しの風を発動。フィールド上のモンスター1体につきライフを200ポイント回復する。」

龍可 LP900 1500

「罨カード発動！妖精の風。フィールド上に表側表示で存在するこ

のカード以外の魔法カード、罠カードを破壊する。」

「何!?!」

クリボンにしていた首輪が破壊され、古の森も消えた。

クリボン ATK/0 300

「そして互いのプレイヤーは破壊されたカード1枚につき400ポイントダメージを受ける。」

龍可 LP1500 300

フランク LP3600 2400

「私はヘカテリスを召喚。」

ATK/1500

「そして墓地のシャインエンジェルとマシユマロンを除外し、神聖なる魂を特殊召喚。」

ATK/2000

決まった!これで全部の攻撃が決まれば龍可の勝ちだ。

「バトル!光神テユスで超魔神イドに攻撃!」

「く!」

フランク LP2400 2200

「神聖なる魂とヘカテリスで直接攻撃！」

「ぐわああああ！」

フランク LP 2200 0

やった！龍可が勝った。

「龍可。」

気づいたらエンシエント・フェアリー・ドラゴンがそこにいた。

「私はまだ捕われてる。あなたの力で私を封印した者を倒しておくれ。」

「え？それはどういう・・・」

そのまま龍可は消えていった。多分現実世界に帰ったんだろう。そしておそらく俺ももうすぐ・・・。

「駆、あなたは別のドラゴンを救っていただきたい。」

え？別のドラゴン？

「そのドラゴンのな・・・。」

そこで俺の精神は現実世界に帰っていった。

俺は控室で目を覚ました。

モニターを見ると龍可も目を覚ましたみたい。今は遊星と一緒にいる。

あ、そういえばこのとき龍可も倒れるんじゃないかな。あ、そういえばこのとき龍可も倒れるんじゃないかな。

ま、いつか。氷室さんたちがなんとかしてるだろうし。

それにしても別のドラゴンを助ける？どういうことだ？

「白熱した大会1日目はこれで終了だ！」

おれが考えているとMCの声が聞こえてきた。

「そして明日の準決勝の対戦カードはこれだ！」

モニターに明日の対戦カードが発表される。

第1試合 不動遊星 vs 十六夜アキ

第2試合 龍可 vs 山岸駆

おれは龍可とか。まさかこの大会で龍可と対戦することになるとはね。楽しみだよ。

こうして大会第1日目が終了した。

第7話 精霊世界突入！ 龍可の怒り（後書き）

どうでしたか？

駆が最初に行ったヒーローシティにつきましてはフォーチュンカットプが終わった後にまただす予定です。

あと、テストがやっと終わったのでこれからどんどん更新したいと思います。といってもサークルとかであんまり更新できないときがあるかもしれませんが。

ということでこんな不定期更新ですがこれからもよろしく願います。

第8話 準決勝前夜 駈と龍可の思い（前書き）

今回はデュエルはありません。

初の恋愛話（？）です。

それではごじげ。

第8話 準決勝前夜 駆と龍可の思い

駆 side

あれから遊星に家に送ってもらい、そのまま遊星は泊まることになった。

今は晩飯を食い終わってベランダでくつろいでいる。そこに遊星と龍可も来て3人で話している。龍可は風呂に入っている。ちなみに3人とも風呂にはもう入っていて今日は珍しく龍可が最後である。

「遊星は明日の準決勝は十六夜アキとだね。」

「ああ。駆と龍可は直接対決だな。」

「うん。なんかすごく楽しみ。」

「私も凄く楽しみ。」

「そうか。」

遊星って結構無口なんだよね。口数も少ないし。

「遊星、お願いがあるんだけど。」

「何だ。」

「彼女を……十六夜アキを救ってほしい。」

「……どうしてだ？」

「彼女は……俺と似ているような気がするから。」

「似ている？」

「うん。みんなに避けられてるところがね。」

「避けられてる？ 私達は駆を避けたことなんてないよ。」

「……昔は避けられてたんだ。俺。ていつかいじめられてた。」

「え！？」

「だからあの人の気持ちがわかるんだ。」

「駆……。」

「本当だったら俺がやりたかったんだけどね。」

そう。俺はアキさんと準決勝でやりたかった。アキさんを助けるために。原作崩壊になるけど、この大会にそんなことは関係ない。

「駆、お前の気持ちはよくわかった。俺もできる限りのことはする。」

「ありがとう遊星。」

「じゃあ俺は部屋に行ってる。」

そう言って遊星は部屋に入っていった。

「駆。」

「何？龍可。」

「明日のデュエルは思いっきり楽しもう。あんな観客の前でデュエルなんてめったにないんだし。」

「そうだね。今日のデュエルは全然楽しめなかったし。明日は普段以上に楽しいデュエルになりそうだね。」

「うん。お互い頑張ろう。」

「ああ。そろそろ寝よう龍可。」

「うん。」

その時、

ドカーン！

雷が近くに落ちた。

「きゃあー！」

龍可が抱きついてきた。

「雷が怖いのか？」

「うん……。」

やっぱり小学生だからな。雷は怖いか。それにしても今も雷は鳴ってるのに雨が全然降らないな。

「ねえ、今日一緒に寝ていい？」

「え？……まあ、別にいいけど……。」

「じゃあ今から行くね。」

そう言っつて龍可は枕をとり部屋に戻って行った。

「……ま、いつか。」

そう言っつて俺も部屋に戻った。

しばらくして龍可が部屋に入ってきた。

俺たちはベッドを半分ずつ使い、入った。まだ雷が鳴っていたせいか、龍可はベッドに入ってからすぐに抱きついてきた。よっぽど怖いんだな。

「ごめんね。迷惑かけちゃって。」

「大丈夫だよ。迷惑なんて思ってないし。それに俺は龍可たちの世話係だしね。」

ただどこうとうときの龍可って可愛いんだよな。だからって恋愛感情は持たないけどね。ていうかそもそも恋愛感情がどういうのか全

然わからないがな。

対する龍可はちょっとばかり顔が赤くなっていた。

「（こころいうときの駆ってかなりやさしいんだよね。駆はああ言ってるけど私はかなり嬉しい。あれ？この気持ち、もしかして私、駆のこと好きになっちゃった？そ、そんなことないよね。うん気のせいだよ。よし。今日はもう寝よう。」

そう心の中で思いながら龍可は寝た。

そしていまだに龍可に抱きつかれてる駆も龍可が寝たので、そのまま寝た。

次の日

めずらしく龍可が駆より先に起きた。

「あ、私駆の部屋で寝たんだっけ。って私、駆に抱きついて寝てたの！？」

ほんのりと顔があかくなる龍可。

その時、駆も目を覚ました。

「ん、あ、おはよう龍可。」

「お、おはよう。」

「さ、起きよう。朝飯作らなきゃ。」

「そうね。」

それからいろいろと準備し俺たちはスタジアムへと向かった。あ、朝飯はちゃんと食べたからね。

龍亞たちと別れ控室に向かう途中ぱったりとアキさんと会った。

アキさんが遊星を見て右腕を押さえる。

「なぜ、忌むべき印だ？痣はお前にとって何なんだ？」

突然遊星がこうアキさんに話す。

「私はこの痣を持つ者を憎む……。嫌悪する。」

アキさんは目をそらしながら答える。

龍可はアキさんを見て少し悲しい表情をしている。

「ヒッヒッヒッヒ。」

不気味な笑い声が聞こえてきた。この声はイエーガーだね。

「これはこれは十六夜様。準決勝の前にゴドウィン長官が一言労いの言葉をと申しています。ご一緒して頂けますでしょうか。」

相変わらず変な口調だね。

「それは困りますね。」

アキの後ろからデイヴァインとその他複数の人が現れた。

「あなたは？」

「アキの保護者……とでも言っておきましょうか。もっともあなたがたの方でもう調べはついているのでしょうが。」

そう言っアキさんを連れて去っていく。

「アキさん……。」

「どうしたの？龍可。」

「うん、あの人を見てるとこの腕と心が痛くてズキズキする……。」

「龍可……。」

龍可の気持ちはわかる。けど……。

「今は……遊星を信じよう。きっと遊星があの人を救ってくれる。」

「……うん。」

そう言っ俺たちは控え室に入る。ちなみに遊星は別の部屋でデュエルの準備をしている。

しばらくしてMCの声が聞こえてきた。

「さあ、いよいよ大会2日目。今日の第1試合からは準決勝。まず1人目は1回戦の衝撃が生々しい、黒薔薇の魔女、十六夜アキ！」
アキさんがフィールドに姿を現した。とたんに観客からブーイングの嵐だ。・・・アキさんがかわいそう。

「対するはサテライトの流れ星、不動遊星！」

遊星がフィールドに姿を現すとブーイングから歓声へと変わった。ま、大方魔女を倒せとしかたなく応援してるんだろうけど。なぜなら昨日は遊星に対してはブーイングだったからね。

「全ての時が今ここに交わる。デュエル・オブ・フォーチュン・カップ準決勝第1試合。スタート！」

「「決闘！」」

いよいよ準決勝が始まった。

第8話 準決勝前夜 駆と龍可の思い（後書き）

どうでしたか？

恋愛話って結構難しいですね。恋愛話になってるかどうかかわかりませんけど・・・。

次回は遊星vsアキの予定です。

ではご指摘やご感想お待ちしております。

第9話 隠された感情 黒薔薇の戦慄（前書き）

今回は遊星vsアキ前編です。

長かったので2つに分けました。

ではごっげ。

第9話 隠された感情 黒薔薇の戦慄

駆side

「決闘！」

遊星 LP4000
アキ LP4000

「私のターン、ドロ！」

遂に準決勝が始まった。

「私はアイヴィ・ウォールを守備表示で召喚。」

DEF/1200

「カードを1枚伏せてターンを終了。」

「俺のターン、スピード・ウォリアーを召喚。」

ATK/900

「スピード・ウォリアーは召喚したターン、攻撃力が2倍となる。」

ATK/900 1800

「バトル！スピード・ウォリアーでアイヴィ・ウォールに攻撃！」

「アイヴィ・ウォールが攻撃対象になったとき、相手フィールドにアイヴィトークンを1体守備表示で特殊召喚する。」

DEF/0

「ソニックエッジ！」

スピード・ウォリアーがアイヴィ・ウォールを蹴り飛ばし、破壊した。

「ターン終了。」

「私のターン、ドロー。リバーズカードオープン、永続罫カード・アイヴィを発動。その効果により、墓地からアイヴィモンスターを特殊召喚できる。私はアイヴィ・ウォールを呼び戻す。」

DEF/1200

「カード・アイヴィはアイヴィ・ウォールに装備され、フィールドから無くなった時、装備モンスターも破壊される。ターンを終了。」

「2人とも慎重ね。」

「そうだね。」

そう、今はね。でもこれは嵐の前の静けさ、ここから激しい攻防が始まる。

「俺のターン、ドロー。戦士族のスピード・ウォリアーをリリース

して、ターゲット・ウォリアーを特殊召喚。」

ATK / 1200

「ターゲット・ウォリアーは、リリースした戦士族モンスターの攻撃力分、攻撃力をアップする。」

ATK / 1200 2100

「バトル！ターゲット・ウォリアーでアイヴィ・ウォールに攻撃。」

「アイヴィ・ウォールが攻撃対象になったとき、相手フィールドにアイヴィトークンを1体を守備表示で特殊召喚。」

DEF / 0

「リボルヴィング・ショット！」

ターゲット・ウォリアーがアイヴィ・ウォールを撃ち、破壊した。

「アイヴィ・ウォールが破壊された事によってカード・アイヴィも破壊されるが、このカードが墓地に送られた時、相手フィールド場にアイヴィトークンが2体守備表示で特殊召喚される。」

DEF / 0

「ターンエンド。」

「遊星の場が埋め尽くされたわね。これがアキさんの戦略なのかしら。」

「そつみいだね。」

そつ。これがアキさんの戦略。ここからアキさんの猛攻が始まる。
遊星、耐えて。

遊星 side

俺の場に4体のアイヴィトークン。このトークンが破壊された時、
おれは300ポイントのダメージを受ける。だがこれで何をしよう
と。。。。

「私のターン、ドロ。手札から魔法カード偽りの種を発動。手札
からレベル2以下の植物族モンスターを1体特殊召喚できる。現れ
よダーク・ヴァージャ。」

DEF / 1000

「そしてダーク・ヴァージャーをリリース！ローズ・テンタクルス
をアドバンス召喚！」

ATK / 2200

「バトル！ローズ・テンタクルスでターレット・ウォリアーを攻撃。
ソーン・ウィップ！」

「くっ！」

遊星 LP4000 3900

僅か100ポイントのダメージだったためか、衝撃が弱かった。

「まだだ。」

「何!?!」

「ローズ・テンタクルスはバトルフェイズ開始時に相手フィールドに存在する植物族モンスター分、攻撃回数を増やす。そして、植物族モンスターを戦闘で破壊した時、相手に300ポイントのダメージを与える。」

「な!」

つまり俺の場には植物族モンスターが4体もいる。つまりあと4回も攻撃することができる。ローズ・テンタクルスの効果で1体につき300ポイント、アイヴィトークンの効果でさらに300ポイント、つまり合計で2400ポイントのダメージを俺は受けることになるのか。

「ローズ・テンタクルスでアイヴィトークンに攻撃! ソーン・ウィツプ1!」

遊星 LP3900 3300

「なっ!?!」

ローズ・テンタクルスのツタが俺の右腕に巻きついたのだと!

「ソーン・ウィップ2!」

遊星 LP3300 2700

今度は右足が巻きつかれた。何をしようと……。

「ソーン・ウィップ3!」

遊星 LP2700 2100

今度は左足が巻きつかれた。

そして拒絶と……怒り……確かにこの痛みは十六夜の叫び……だが感じる……お前のもう一つの感情。

「はぁ……はぁ……はぁ……これが……ラスト・ソーン・ウィップ
!」

今度は俺の腰に巻きつくと宙に浮かべていった。

俺はアキの表情を見る。すると彼女は……笑っていた。

「お前……まさか……うわぁ!」

そのまま俺は地面に叩きつけられた。

遊星 LP2100 1500

会場には大きな衝撃が襲っていた。

それよりも彼女のあの表情……。そういうことか……。

「俺の……ターン……シールド・ウォリアーを……守備表示で……召喚。」

DEF / 1600

「カードを2枚伏せて……ターンエンド。」

「ようやくわかった。お前の拒絶や怒り……その先にあるもう一つの感情を……十六夜アキ、お前は破壊を、その力を楽しんでいる。その力に優越を感じている。」

「私が……破壊を楽しんでる?」

駆side

「私が……破壊を楽しんでる?」

そう、アキさんは破壊を楽しんでる。でもそのことにアキさんは気づいていない。

「私のターン、ドロ、永続魔法アイヴィ・シャックルを発動。相手フィールドに存在する全てのモンスターは、私のターンの間は植物族とすることができる。お前のシールド・ウォリアーを戦士族から植物族に変更する。」

そういえばこのころアイヴィ・シャックルって永続罨じゃなくて永

続魔法だったなあ。

「そして、ローズ・テンタクルスの効果、バトルフェイズ開始時に相手フィールドに存在する植物族モンスター1体につき1回攻撃回数を増やすことができる。よってローズ・テンタクルスは2回の攻撃が出来る。ローズ・テンタクルスでシールド・ウォリアーを攻撃！ソーン・ウィップ！」

ローズ・テンタクルスがツタでシールド・ウォリアーを突き刺し、破壊した。そしてその衝撃が会場に響いている。

「現在、シールド・ウォリアーは植物族。ローズ・テンタクルスは植物族モンスターを破壊した時、相手に300ポイントのダメージを与える」

ローズ・テンタクルスが遊星を叩きつけた。

「くっ……。」

遊星 LP 1500 1200

そしてやはりアキは笑っていた。

「やはりお前はそうなのか。」

「？」

そしてアキさんはまだそのことに気が付いてない。

「ローズ・テンタクルスで2回目の攻撃。相手プレイヤーに直接攻

撃！」

「トランプカードオープンカード・ディフェンス。手札のカード1枚をコストに、相手のモンスターのダイレクトアタックを無効にし、カード1枚ドローする。」

「ターンを終了する。」

「十六夜・・・お前は痛みを与える事を喜んでいる。」

「やめろ。何を言っている?」

「・・・俺のターン、手札よりジャンク・シンクロンを召喚。」

ATK / 1300

「ジャンク・シンクロンの効果により、自分の墓地に存在するレベル2以下のモンスターを守備表示で特殊召喚する。スピード・ウオリアーを特殊召喚！」

DEF / 400

「そして、Lv2のスピード・ウオリアーにLv3のジャンク・シンクロンをチューニング！シンクロ召喚、出でよ！ジャンク・ウオリアー！」

ATK / 2300

出た！ジャンク・ウオリアー。これも序盤の遊星のデュエルで毎回出てくるモンスター！

「さらに手札から装備魔法ジャンク・アタックをジャンク・ウォリアーに装備する。ジャンク・ウォリアーでローズ・テンタクルスに攻撃！スクラップ・フィスト！」

ジャンク・ウォリアーが勢いよくローズ・テンタクルスに殴り込み破壊した。

アキ LP4000 3900

「さらに、ジャンク・アタックの効果、装備モンスターがバトルによってモンスターを破壊した時、その攻撃力の半分のダメージを与える。」

アキ LP3900 2800

「ターンエンドだ。」

アキさんにダメージが与えられたことで観客が盛り上がっている。・・・まったく観客の奴らは。

「（遊星はただ戦ってるだけじゃない。あの人に何かを・・・）」

「私のターン、ドロー。永続魔法アイヴィ・シャクルの効果により、ジャンク・ウォリアーを戦士族から植物族に、そしてチューナーモンスターコピー・プラントを召喚。」

DEF / 0

「コピー・プラントは1ターンに1度、フィールド場に存在する植

物族モンスターを選択し、レベルを同じにする事ができる。ジャンク・ウォリアーのレベルをコピー。」

コピー・プラントの姿がジャンク・ウォリアーへと変わっていった。

「墓地に眠るダーク・ヴァージャーの効果を発動。植物族のチューナーを召喚した時、墓地より特殊召喚できる。」

ATK/0

来る！アキさんのエースモンスターが。

「Lv2のダーク・ヴァージャーにLv5のコピー・プラントをチューニング！冷たい炎が世界の全てを包み込む、漆黒の花よ開け！シンクロ召喚、現れよ！ブラック・ローズ・ドラゴン！」

ATK/2400

「ブラック・ローズ・ドラゴンの効果、墓地の植物族モンスター1体を除外することで、このターンの間、相手モンスターの攻撃力を0にすることができる。アイヴィ・ウォールを除外。ローズ・リストラクション」

「ジャンク・ウォリアー！」

ATK/2300 0

「ブラック・ローズ・ドラゴンでジャンク・ウォリアーを攻撃！ブラック・ローズ・フレア！」

「墓地からシールド・ウォリアーの効果を発動！墓地にあるこのカードを除外することで、モンスターの戦闘による破壊を無効にする。」

「だが、戦闘ダメージは発生する。」

「トラップカードオープン！スピリット・フォース。プレイヤーが受ける戦闘ダメージを1度だけ0にする！その後墓地にある守備力1500以下のモンスターを手札に加える。」

遊星はジャンク・シンクロンを手札に加えた。

「カードを2枚伏せてターンを終了。」

「魔女よ消えろ！」

「消え失せろ！」

「魔女の巢に帰れ！」

観客のやろつ……どこまでひどい言葉をかければ気が済むんだよ！

「そうよ……その通りよ……私は魔女……痛みを与えて……それを楽しむ恐ろしい女！楽しいわ、私を孤独に追いやる者どもに私の力によって痛みを与えるのが……本当に楽しい！」

アキさん……。確かに楽しんでるように見える。でも何か違和感がある。遊星、アキさんを助けて。

遊星 side

楽しんでる・・・だが、その喜びを彼女自身は・・・。

「俺のターン。」

プリベント・スター、モンスターを守備表示にして装備し、相手モンスターの動きを封じるカード、この流れならば。

「手札よりジャンク・シンクロンを召喚。」

ATK / 1300

「ジャンク・シンクロンの効果でスピード・ウォリアーを特殊召喚！」

DEF / 400

ジャンク・ウォリアーの効果でスピード・ウォリアーの攻撃力がジャンク・ウォリアーに加算される。

ATK / 2300 3200

スターダスト・ドラゴン・・・力を・・・貸してくれ！

「Lv5のジャンク・ウォリアーにLv3のジャンク・シンクロンをチューニング！集いし願いが、新たに輝く星となる、光指す道となれ！シンクロ召喚！飛翔せよスター・ダスト・ドラゴン！」

白銀の龍が現れる。

ATK / 2500

ここに2体のシグナーの龍が激突する。

第9話 隠された感情 黒薔薇の戦慄（後書き）

どうでしたか？

まあ、アニメと同じ展開なのでアニメを見ている人はもう展開がわかっているとと思いますが。

次回は遊星vsアキの後編、そしてたぶん駆vs龍可がちょっとはいると思います。

ではご指摘やご感想をお待ちしております。

第10話 星屑の龍VS黒薔薇の龍 そして大天使降臨！？（前書き）

遊星VSアキ後編、そして遂に最年少対決が始まります。

ではどじろ。

第10話 星屑の龍VS黒薔薇の龍 そして大天使降臨!?

龍可side

スターダスト・ドラゴン。遊星のエアスマンスターがこの大会で初めて登場した。

スターダストとブラックローズが睨みあってる。

頑張って・・・遊星。

遊星side

「忌むべき印・・・。」

突然、十六夜が右腕を押さえながらしゃべりだした。

「私はこの印を憎む・・・この力が無ければ私は・・・。」

「力に喜びを感じる事は無かった。痛みに快楽を得ることも。」

「そう・・・この痣は、そんな人を超えた怪物に刻印された忌むべき印。だから、私は私を憎む・・・抑えきれない破壊への思いに・・・私は生きてはいけないとさえ思った。でも、想いが募れば募るほど、それは破壊への衝動に添加されていった。そして私は私であることをやめた。もう1人の自分を作り上げた。仮面の私は私じゃない。破壊を楽しんでも、痛みを笑っても構わない。そんな時、ディヴァ

インが教えてくれた。仮面など必要無いと・・・そのままの私で良いんだと・・・私はその言葉で救われた。ただ生きているだけで良い、もう考えない、ただ感じるだけ・・・」

「考える！お前自身が。」

「どうでも良い。ディヴァインが考えてくれる」

「逃げるな十六夜！」

「どうしようもない・・・私にはどうすることも出来ない」

「出来る！その喜びを否定するお前がいる。その思いがある限り、やり直せる。お前自身を救い出す事が出来る！」

「うるさい・・・。」

届かせる・・・このデュエルで彼女の心に。

駆side

「スター・ダスト・ドラゴンでブラック・ローズ・ドラゴンに攻撃
！」

スター・ダスト・ドラゴンが攻撃する瞬間、シグナーの全員の痣が疼きだした。

そして・・・、

「っ！」

なぜか俺の右腕も疼きだした。見てみると俺にも赤き龍の痣があった。

「駆、その腕。」

「まさか、俺もシグナーなの？」

しかもそれは6人目のシグナーの痣、つまりいずれ龍亞にでるはずの痣が俺にでていた。

「何で・・・俺に。」

そう言ってる間にスター・ダスト・ドラゴンの攻撃によってブラック・ローズ・ドラゴンは破壊された。

アキ LP2800 2700

どうなってるの？何で俺に痣が……。でも俺にシグナーの龍は・・・はっ！

『駆、あなたは別のドラゴンを救っていただきたい。』

まさか、俺のシグナーの龍はエンシエント・フェアリーが言ったあのドラゴンのことか！

とりあえず今はこのデュエルだ。頑張れ遊星。

「私は・・・ただ感じるだけ。お前から・・・痛みを・・・苦しみを・・・」

そう言つて、十六夜は仮面を着けてしまった。

「十六夜・・・。」

「私のターン、ドロー、魔法カードマジック・プランターを発動。フィールドに存在する永続魔法を墓地に送る事で、デッキからカードを2枚ドロウする。」

十六夜はアイヴィ・シャックルを墓地に送った。

「永続罫ウィキッド・リボーン。800ポイントのライフを支払い墓地のシンクロモンスターを特殊召喚する。」

アキ LP2700 1900

「私は、ブラック・ローズ・ドラゴンを復活させる！ウィキッド・リボーンはブラック・ローズ・ドラゴンの装備カードとなる。装備モンスターはこのターン攻撃は出来ない、そして装備カードがフィールドに存在しなくなった場合、そのモンスターを破壊する。さらに、装備モンスターがこの効果以外で破壊されたターンのエンドフェイズに特殊召喚される。ブラック・ローズ・ドラゴンの効果！特殊召喚に成功した時、フィールド場の全てのカードを破壊するブラック・ローズ・ガイル。」

不味い……。

「スター・ダスト・ドラゴンの効果を発動！破壊する効果が発生した時、このカードをリリースする事で無効にし、破壊する。ヴィクトム・サンクチュアリ！」

スター・ダスト・ドラゴンがブラック・ローズ・ドラゴンを羽で包み込み共に消えていった。

「まだまだ、フェニキシアン・シードを召喚。」

ATK/800

「フェニキシアン・シードの効果によりこのカードをリリースし、フェニキシアン・クラスター・アマリリスを特殊召喚する。」

ATK/2200

「フェニキシアン・クラスター・アマリリスで、スピード・ウォリアーに攻撃、フレイム・ペタル！」

フェニキシアン・クラスター・アマリリスがスピード・ウォリアーを縛り付けて破壊した。

「フェニキシアン・クラスター・アマリリスは攻撃した後、自らを破壊する。スキッター・フレイム。」

大きな爆発音とともにフェニキシアン・クラスター・アマリリスが破壊された。

「そして相手に800ポイントのダメージを与える。」

「ぐっ……。」

遊星 LP 1200 400

「フフっ・・・、カードを1枚伏せる。」

「スター・ダスト・ドラゴンは効果を発動したこのターンのエンドフェイズに復活する！」

ATK / 2500

「ウィキッド・リボーンの効果により、このターンのエンドフェイズにブラック・ローズ・ドラゴンを特殊召喚。そして永續罠オーバー・デッド・ラインを発動。墓地から特殊召喚した私のモンスターは攻撃力が1000ポイントアップする。」

ATK / 2400 3400

「そして、フェニキシアン・クラストー・アマリリスも効果により守備表示で特殊召喚する。ターンを終了。」

「俺のターン。」

コズミック・ブラスト・・・このカードは、自分フィールドのドラゴン族のシンクロモンスターがフィールドを離れたとき、その攻撃力分のダメージを与える・・・よし、勝利の方程式が完成した。

「スター・ダスト・ドラゴンを守備表示に変更。」

ATK/2500 DEF/2000

「手札から装備魔法プリベント・スターをスター・ダスト・ドラゴンに装備、このカードはモンスターが守備表示になった時にモンスターに装備する。1ターンに1度相手モンスターを選択する。そのモンスターは攻撃出来ず、表示変更も出来ない。俺はフェニキシアン・クラスター・アマリリスを選択！」

「罫カードシンクロ・バック。自分フィールドのシンクロモンスターを1体をエクストラデッキに戻す。私はブラック・ローズ・ドラゴンを選択。」

ブラック・ローズ・ドラゴンがアキのエクストラデッキの中に戻っていった。

「カードを1枚セットしてターンエンド。」

「私のターン、ドロー、シンクロバックの効果により、ブラック・ローズ・ドラゴンを復活させる！」

ブラック・ローズ・ドラゴンが再度現れた時、十六夜が右腕・・・痣があるところを押さえた。

「くっ・・・。」

「楽しくないんだろっ?」

「うるさい・・・。」

「苦しいんじゃないのか？」

「（どうして・・・どうしてこの痣が疼く・・・どうして楽しくない・・・どうして苦しい・・・）」

「お前自身が、変わる時がやってきたんだ。」

「!？」

「お前を苦しめてきた破壊への喜び・・・その痛みが、同じ痣を持つ俺達に共有する痛みが変わって来たんじゃないのか？俺達を導くこの印・・・この痛みは何かを訴えている。その答えを得るには自分で考えなければいけないんだ。その答えをこの痣は持っているんじゃないのか？考えを預けるな！お前自身で考えるんだ！」

「魔女の私が・・・何を考えるの・・・ダイヴァインが私を導いて、愛してくれればそれで・・・。」

「違う！お前がお前を愛するんだ！」

「そんな事が出来れば・・・出来れば・・・出来ないから苦しんでるんじゃないか！」

十六夜がつけていた髪飾りが落ちた。

「ブラック・ローズ・ドラゴンの効果を発動！ブラック・ローズ・ガイル！」

ブラック・ローズドラゴンから突風が起こり、大きな衝撃が会場を

襲う。

「フィールドの全てのカードを破壊する！」

「何度でも受け止めてやる！全部吐き出せ！お前の悲しみを！ヴィクトテム・サンクチュアリ！」

スター・ダスト・ドラゴンがブラック・ローズ・ドラゴンを包み込み共に消えた。

「・・・！痛みが薄らいでいく・・・これでプリベント・スターからの呪縛からフェニキシアン・クラスター・アマリリスが解放される。お前のフィールドはがら空き、ダイレクトアタックが決まれば私の勝ちだ。全て無くなれば良い・・・考えさせるな・・・お前はやはり・・・忌むべき敵。」

「だったら、どうして泣く？」

「!？」

「トラップカードコズミック・ブラスト！俺のフィールドのドラゴン族のシンクロモンスターがフィールドを離れたとき、そのモンスターの攻撃力分のダメージを相手に与える。」

アキ LP1900 0

「た・・・す・・・け・・・て・・・。」

「十六夜！」

俺は十六夜に話しかけようとしたが、観客の声によってかき消されてしまった。

「ざまあみる！魔女！」

「魔女の巢に帰れ！二度と来るな！」

十六夜の後ろからさっきの男・・・十六夜の保護者（？）がやってきた。

「よくやったねアキ。さあ、一緒に戻ろう。」

そう言っただけで一緒に退場していった。

「勝者決定！不動遊星！」

十六夜・・・アキ・・・

馭side

原作通り遊星が勝ったね。それにしてもアキさん・・・大丈夫だろうか・・・。

それより次は俺と龍可のデュエル。この大会で初めてじゃないかな。何の障害もない純粹に楽しむことのできるデュエルは。

ちなみに龍可は遊星とアキさんのデュエルが終わった瞬間に俺とのデュエルの準備のために別の控室に行った。

さてと行きますか。

龍可 side

次は私と駆のデュエル。

1回戦は精霊界とかなんやかんやで全然楽しめなかったから、このデュエルはもう純粹に楽しいデュエルをしよう。駆もそれを望んでるはず。

『クリリン。』

「クリボン、今日もよろしくね。」

『クリリン！』

ふふ、クリボンも楽しみにしてるわね。

じゃ、そろそろ行きますか。

駆 side

MCの紹介も終わり、俺と龍可はフィールドで対峙している。

「いくよ龍可。」

「ええ。」

「さあ、今大会の最年少対決、勝つのはどっちだ！準決勝第2試合、スタート！」

「決闘！」

駆 LP4000

龍可 LP4000

先行は俺だ。

「俺のターン、ドロー！」

・・・ここは守りに専念するか。

「俺は手札から融合を発動。手札のバブルマンとクレイマンを融合！E・HEROマッドボールマンを融合召喚！」

DEF/3000

「カードを1枚伏せてターンエンド。」

これでいいかな。守備力3000だったらそう簡単に越えられないだろうし。

「私のターン、私は手札から永続魔法神の居城ーヴァルハラを発動！」

え？いきなりかよ。

「ヴァルハラの効果発動！自分フィールド上にモンスターが存在しない時、1ターンに1度手札から天使族モンスターを1体特殊召喚できる。私はこの効果で大天使クリステアを攻撃表示で特殊召喚！」

「な！」

ATK/2800

まずい。いきなりクリステアを召喚してしまった。これじゃあ融合が使えない。今はマッドボールマンで凌ぐしか……。

「さらに私は勝利の導き手フレイヤを召喚！」

ATK/1000

「フレイヤが場にいる限り、私の天使族モンスターの攻撃力と守備力は400ポイントアップする。」

ATK/2800 3200

ATK/1000 500

ま、まずい。

「バトル！クリステアでマッドボールマンを攻撃！」

「くっ！」

クリスティアからだされた光でマッドボールマンは破壊された。

「さらにフレイヤで駆に直接攻撃！」

「ぐっ。。。」

駆 LP4000 3500

「カードを1枚伏せてターンエンドよ。さあ駆、この状況をどうやって打開する？」

くっ・・・、非常にまずい展開だな。まさかマッドボールマンがこうもあっさり倒されるなんて。クリスティアがいる今、この伏せカードは使えない。くそっ！

でも俺はまだ諦めない！デュエルはまだ始まったばかりだ！

第10話 星屑の龍vs黒薔薇の龍 そして大天使降臨！？（後書き）

どうでしたか？

今回は龍可vs駆決着！クリスティアを倒す意外な方法とは？そして一進一退の攻防に決着をつけるモンスターとは。

あと、1週間ぐらい実家に帰るのでその間は多分更新できないと思います。ご了承ください。

では、次回もお楽しみに。ご指摘やご感想お待ちしております。

第11話 決着！駆VS龍可 ハネクリボー進化！（前書き）

お待たせいたしました。駆VS龍可決着編です。

題名の通りハネクリボーが進化します。

それとこの話から漫画やTFのオリカを使います。ご了承ください。

それではどうぞ。

第11話 決着！駆VS龍可 ハネクリボー進化！

駆 side

状況は最悪だ。龍可の場にはクリスティアと勝利の導き手フレイヤと伏せカードが1枚。こっちの場にはクリスティアのおかげで使えない伏せカードが1枚。お互いに手札は2枚ずつ。しかも俺の手札はネクロダークマンとネクロ・ガードナー。次のドロ次第では次の龍可のターンで終わる可能性もある。

「俺のターン！」

引いたのは・・・これならまだ希望はある。

「俺は手札から速攻魔法手札断札を発動。お互いに手札を2枚捨て2枚ドロする。」

！？このカードは……。これならクリスティアを倒せる。でもそれにはあのモンスターが必要。ここはこれで耐えるしかない。

「カードを1枚伏せてターンエンド。」

「私のターン。」

さあどう来る？

「私はコーリング・ノヴァを召喚。」

ATK/1400 1800

「バトル、クリスティアで直接攻撃！」

「カウンター畏攻撃の無力化発動！その攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了させる。」

「ならこれでターンエンドよ。」

ふう。なんとか耐えた。けどあのカードを引かなきゃ次のターンにやられる。なんとしてもこのターンで引かなきゃ。

「俺のターン、ドロー！」

これじゃない！けどこれならまだいける。

「俺は手札から魔法カードHEROの遺産を発動。墓地にLV5以上のHEROが2体以上いるとき3枚ドローできる。」

「え？でも墓地に上級モンスターはマッドボールマンだけのはずだけど。」

「いやマッドボールマンのほかに手札断札の効果で墓地に送ったネクロダークマンがいるよ。」

「！？いつの間に。」

「よって俺は3枚ドロー！」

来た！

「俺はバーストレディを召喚。」

ATK/1200

「そして手札から魔法カードバースト・インパクトを発動！自分フィールド上にバーストレディがいるとき、フィールド上に存在するバーストレディ以外のモンスターを破壊し、破壊されたモンスターのコントローラーに破壊したモンスターの数×300ポイントのダメージを与える。」

「嘘！？きゃあ！」

龍可 LP4000 3100

「クリスティアはフィールド上から墓地に送られる時、墓地にはいかずデッキの1番上に戻る。」

これで龍可の場はガラ空き！

「バトル！バーストレディで龍可に直接攻撃！」

「きゃっ！」

龍可 LP3100 1900

「カードを1枚伏せてターンエンド。」

よし！これで状況は俺の方が優位になった。だけど龍可はこれで終わるような奴じゃない。ここから反撃してくる。

「私のターン、私は手札から魔法カード天空の宝札を発動。手札の天使族・光属性モンスターを除外して2枚ドロウする。ただしこのターン私は特殊召喚できず、攻撃することもできない。私はクリスティアを除外して2枚ドロウ。」

クリスティアを除外！？何を企んでいる？龍可。

「私はムドラを召喚。」

ATK / 1500

「ムドラは自分の墓地に存在する天使族モンスター1体につき攻撃力が2000ポイントアップする。私の墓地には2体の天使がいる。よって4000ポイント攻撃力アップ。」

ATK / 1500 1900

「カードを1枚伏せてターンエンド。」

「俺のターン！」

手札にムドラを倒せるカードはない。仕方ない守りを固めるか。

「バーストレディを守備表示に変更。」

ATK / 1200 DEF / 800

「ワイルドマンを守備表示で召喚。」

DEF / 1600

「これでターン終了。」

「私のターン。(このカードを使うしかないわ。駆の手札を増やすことになるけど。)私は手札から魔法カード壺の中の魔術書を発動。互いのプレイヤーはカードを3枚ドロウする。」

思わぬところで手札補充ができた。これはラッキーだけど。

「・・・ふっ。」

笑った!? まずい!何か仕掛けてくる。

「私は手札から光神化を発動。手札から天使族モンスターを攻撃力を半分にして特殊召喚する。私は手札からジェルエンディオを特殊召喚。」

ATK / 1700 850

「さらにジェルエンディオの効果!天使族・光属性モンスターをアドバンス召喚する時、2体分のリリースとすることができる。ジェルエンディオを生贄に、降臨せよThe splendid V
ENUS!」

な!VENUSだと!?

ATK / 2800

ムドラ ATK / 1900 2100

「VENUSの効果で天使族以外のモンスターは攻撃力、守備力が500ポイントダウンする。」

バーストレディ DEF/800 300
ワイルドマン DEF/1600 1100

「バトル！2体でバーストレディとワイルドマンに攻撃！」

バーストレディとワイルドマンが破壊された。でもこっちもただしや終わらない。

「畏発動！ヒーローシグナル。自分のモンスターが戦闘で破壊されたとき、デッキまたは手札からLv4以下のE・HEROを特殊召喚できる。俺はデッキからE・HEROフォレストマンを守備表示で召喚。」

DEF/2000 1500

「・・・やっかいなモンスターを残しちゃったわね。これでターンエンドよ。」

なんとか耐えた。VENUSは予想外だったな。でもさっきの壺の中の魔術書のおかげで手札は十分。こっから反撃だ！

「俺のターン！スタンバイフェイズにフォレストマンの効果発動。デッキまたは墓地から融合のカードを1枚手札に加える。俺はデッキから融合を手札に加える。そして融合を発動！手札のスパークマンとオーシャンを融合。E・HEROアプソルトZeroを融合召喚！」

ATK / 2500 2000

「さらにミラクル・フュージョンを発動！場のアブソルトZeroと墓地のスパークマンを融合。」

「（やばいわ、この展開は・・・。）」

「E・HERO The シャイニングを融合召喚！」

ATK / 2600

「アブソルトZeroの効果発動！このカードが場を離れた時、相手フィールド上に存在するモンスターをすべて破壊する。」

ムドラとVENUSが凍りつき、破壊された。

「そしてThe シャイニングの効果！シャインングは除外されているE・HERO1体につき攻撃力が300ポイントアップする。除外されているE・HEROはアブソルトZeroとスパークマンの2体。よって600ポイント攻撃力がアップする。」

ATK / 2600 3200

「バトル！シャイニングで龍可に直接攻撃。オプティカルストーム！」

シャイニングが出した光が龍可を襲う。これが通れば俺の勝ちだ！

「リバースカードオープン！聖なる天啓！相手が直接攻撃してきた時、デッキからLv4以下の天使族モンスター2体を墓地に送りそ

の戦闘を無効にする。私は聖なるあかりとウィクトーリアを墓地に送る。」

防がれたか……。さすが龍可。

「俺はカードを1枚伏せてターンエンド。」

「私のターン！・・・駆！このターンで終わらせるわ！」

何！？つまりこのターンでシャイニングを倒すということだよな。そんなことが・・・。

「私は手札からおろかな埋葬を発動。デッキから堕天使スペルビアを墓地に送る。」

堕天使だと！？今まで龍可は堕天使を使っていなかったぞ！まさか・・・、

「そう、このデュエルの直前にこのカードをデッキに入れたのよ。」
心を読まれた！？いや、そんなこと言ってる場合じゃ・・・。

「リバーズカードオープン！リビングデットの呼び声。この効果で墓地から堕天使スペルビアを特殊召喚！」

ATK/2900

だけど攻撃力はシャイニングの方が・・・。

「スペルビアの効果発動！このカードが墓地からの特殊召喚に成功

した時、墓地の天使族モンスターを1体特殊召喚できる。」

な！そんな効果があつたなんて……。

「墓地からThe splendid VENUSを特殊召喚！」

ATK/2800

「VENUSの効果でシャインングの攻撃力は500ポイントダウンするわ。」

ATK/3200 2700

まずい。これで攻撃力500以上のモンスターを出されたら……、

「さらに神秘の代行者アースを通常召喚。」

ATK/1000

「神秘の代行者の効果でデッキから奇跡の代行者ジュピターを手札に加える。」

俺の……負け……。

俺は力なく下を向いた。

「バトル！スペルビアでシャインングを攻撃！」

駆 LP3500 3300

「これで終わりよ！VENUSとアースで駆に直接攻撃！」

駆 LP3300

これで・・・俺の・・・負け・・・・・・・・・・・・・・・・じゃないんだよね。

「えー!？」

駆 LP100

「嘘!？何でLPが100に……。今の総攻撃で0になったはずじゃ。」

龍可も客席のみんなも驚いてるね。じゃ、そろそろ種明かし。

「俺はこの罠カードヒーロー・ソウルを発動させた。」

「ヒーロー・ソウル？」

「そう。ヒーロー・ソウルはHEROが破壊されたターン、プレイヤーのLPが0になった時、LPを100にする。」

「な!？そんなカードがあつたなんて…………。」

それは龍可も同じだよ。墮天使を持つてるなんて知らなかったし。と、このカードを発動させなきゃ。

「リバースカードオープン！ショック・ドロ。このターン受けたダメージ1000ポイントにつき1枚カードをドロする。俺が受けたダメージは3000を超えている。よって3枚カードをドロ」

「！」

「ここにきてドローカード!? くっ、私はこれでターンエンドよ。」
ふう。何とか耐えたものの今の俺の手札に逆転のカードはない。
このドローにすべてがかかっている。

「俺の・・・ターン!」

!?!このカードは……。そう、あんたが決着をつけてくるんだね。

「俺はカードを3枚伏せてターンエンド。」

「伏せカードのみ!?!」

このカードにすべてを託す。

「私のターン! 私はサイクロンを発動!」

な!ここでサイクロン!?!なんつうドローだよ。

「真ん中の伏せカードを破壊する。」

破壊されたのは……。神の宣告。助かった。重要な2枚のカードが残った。

「いくわよ駆! VENUSで直接攻撃!」

攻撃してきた……。でもそれが命取りだよ。龍可。

「速攻魔法クリボーを呼ぶ笛を発動！デッキからハネクリボーを特殊召喚する！」

『クリクリー！』

DEF / 200

「構わないわ。そのままハネクリボーに攻撃！」

「いくよハネクリボー！」

『クリクリー！』

「リバーズカードオープン！進化する翼！手札2枚をコストにハネクリボーを進化させる。ハネクリボーLv10を特殊召喚！」

ATK / 300

「ハネクリボーLv10の効果発動！このカードをリリースすることで相手フィールド上の攻撃表示モンスターをすべて破壊し、破壊したモンスターの元々の攻撃力分のダメージを相手に与える。」

「そんな……。」

「これで終焉よ龍可！行けえハネクリボー！」

『クリクリー！』

「きゃあああ！」

ハネクリボーから出された光で龍可の場のモンスターがすべて破壊された。

龍可 LP19000

「決着！準決勝第2試合、最年少対決を制したのは、HERO使いの山岸駆だー！」

危なかった。最後進化する翼を引かなかったら俺の負けだったな。たいがい俺もチートドローだな。とにかく、

「ありがとう。ハネクリボー。」

『クリクリー』

さてと、

「龍可、大丈夫？」

「駆・うん、大丈夫。それにしてもハネクリボーにやられるなんて思わなかったわ。ハネクリボーってあんな効果があったのね。」

『クリクリー』

「今回はハネクリボーに助けられたね。あそこで進化する翼を引かなかったら負けてたもん。」

「そうなの？とにかく決勝進出おめでとう駆。次も頑張つてね。遊星とのデュエル。」

「うん。」

さあ、次は待ちに待った遊星とのデュエルだ！

第11話 決着！駆V S 龍可 ハネクリボー進化！（後書き）

どうでしたか？

今回はフォーチュンカップ決勝戦、駆V S 遊星です。

ではご指摘やご感想お待ちしております。

第12話 駆VS遊星（前編）遊星の猛攻（前書き）

題名通り駆VS遊星前編です。

それではどうぞ。

第12話 駆vs遊星（前編）遊星の猛攻

駆side

いよいよフォーチュンカップも決勝戦。相手は当然ながら遊星。
・この試合勝っていいのだろうか？

もし俺が遊星に勝ってしまったら当然ながらジャックと戦うのは俺になる。だがそうなったらいくら俺がシグナーの痣（何故あるかは知らないけど。）を持つてるとはいえシグナーの龍を持つていない俺がデュエルしても赤き龍は現れないんじゃないか？あれはなんだかんだいって大事なイベントだからな。

だから俺はこの決勝戦勝つてはいけないことになる。・・・ていうかあの遊星のチートドロに元から勝てる気がしないかけどな。よし！決めた。この試合も全力でいく。じゃないと遊星に失礼だし、こんなこと言いながらもうすでに原作崩壊させまくってるしな。

さて、行きますか。決勝の舞台に。

場所は変わってデュエルフィールド。

そこにはすでに遊星と駆が対峙していた。

「駆、俺はお前とのデュエルを楽しみにしていた。」

「俺も遊星とのデュエルは楽しみだったよ。」

「遠慮はいらない。全力で来い！」

「望むところだよ遊星。楽しいデュエルをしようぜ！」

「ああ。行くぞ！」

会話が終わり俺も遊星もデュエルディスクを構える。

「さあこのデュエルに勝ってジャックとのスペシャルデュエルに駒を進めるのはどっちだ！デュエル・オブ・フォーチュン・カップ決勝戦。スタート！」

「「決闘！」」

駆 LP4000

遊星 LP4000

「俺の先行、ドロー！」

げ！通常召喚できるモンスターがいねえ。ここはこれで。

「魔法カード発掘作業を発動。手札を1枚墓地に送り、1枚ドローする。俺は手札のネクロダークマンを墓地に送り、1枚ドロー！」

また上級モンスター。でも、

「墓地のネクロダークマンの効果発動。このカードが墓地にある時、1度だけE・HEROを生贄なしで通常召喚できる。おれはエッジマンを通常召喚。」

ATK / 2600

「攻撃力2600・・・最初から飛ばしてるな、駆。」

いやいや、ただ単に手札が事故ってるだけですから。むしろ発掘作業があつてラッキーだっただけですよ。

「カードを3枚伏せてターンエンド。」

それにしてもいきなりエツジマンを召喚できるなんてラッキーだった。さあ、どう来る？遊星。

「俺のターン、俺は魔法カード希望の転生を発動。手札のモンスター2枚を墓地に送り、2ターン目の自分のスタンバイフェイズにデッキからモンスターを1枚手札に加える。」

希望の転生？何だそれ？そんなカード遊星使ってたっけ？

(注：駆は遊戯王の映画を観る前に転生したので映画でしか出てないカードは知りません。)

「そして俺はジャンク・シンクロンを召喚。」

ATK / 1300

「ジャンク・シンクロンの効果発動。このカードが召喚に成功した時、墓地のLv2以下のモンスターを守備表示で特殊召喚できる。俺はチューニング・サポーターを特殊召喚。」

DEF / 300

「さらに墓地のボルト・ヘッジボッグの効果を発動。自分フィールドにチューナーがいる時、墓地から特殊召喚できる。来い！ボルト・ヘッジボッグ。」

DEF / 800

「さらにモンスターの召喚に成功したターン、このモンスターは特殊召喚できる。ワンショット・ブースターを特殊召喚！」

ATK / 0

凄い遊星。１ターンで4体のモンスターを召喚した。相変わらずの展開力だね。って感心してる場合じゃない！

「Lv1のワンショット・ブースターとLv1のチューニング・サポーターにLv3のジャンク・シンクロンをチューニング！集いし星が、新たな力を呼び起こす。光差す道となれ！シンクロ召喚！いでよ、ジャンク・ウォリアー！」

ATK / 2300

「ジャンク・ウォリアーの効果！このカードがシンクロ召喚に成功した時、このカードの攻撃力は自分フィールド上にそんざいするLv2以下のモンスターの攻撃力分アップする！」

ATK / 2300 3100

攻撃力がエッジマンを上回った！？

「さらにチューニング・サポーターがシンクロ素材として墓地に送られた時、カードを1枚ドロウする。」

そしてドロウ・・・まったく隙がないね遊星は。

「まだまだ！手札のモンスターカードレベル・ウォリアーを墓地に送り、クイック・シンクロンを特殊召喚！」

ATK/700

クイック・シンクロンだと！？まさか・・・、

「Lv2のボルト・ヘッジボッグにLv5のクイック・シンクロンをチューニング！集いし思いが、ここに新たな力となる。光差す道となれ！シンクロ召喚！燃え上がれ、ニトロ・ウォリアー！」

ATK/2800

1ターンに2回のシンクロ召喚だと！？どこまで飛ばす気だよ！

「バトル！ジャンク・ウォリアーでエッジマンに攻撃！」

くっ！俺の伏せカードに攻撃を防ぐカードはない。でもこれでライフだけは・・・。

「リバーズカードオープン！エレメンタル・チャージ。自分フィールドにそんざいするE・HERO1体につきライフを1000ポイント回復する。」

駆 LP4000 5000

「だが攻撃は止まらない！行け！ジャンク・ウォリアー。スクラップ・フィスト！」

ジャンク・ウォリアーの拳でエッジマンが破壊された。

駆 LP5000 4500

「さらに二トロ・ウォリアーで駆に直接攻撃！ダイナマイト・ナックル！」

「畏発動！ヒーロスピリッツ。このカードはE・HEROが戦闘で破壊されたターンに発動可能。相手モンスター1体からの戦闘ダメージを0にする。」

「・・・さすがだな。俺はこれでターンエンドだ。」

なんとか耐えた……。けどなんつう猛攻だよ。初めから2体のシンクロモンスターはさすがに予想外だ。おまけにエッジマンはあっさりやられたし。とにかくこのドローで何とかしないと。

「俺のターン、ドロー！」

くっ！これじゃ駄目。耐えることしかできない。

「カードを2枚伏せてターンエンド。」

「俺のターン、遠慮なくいかせてもらう。ジャンク・ウォリアーで直接攻撃！」

「リバースカードオープン！残留思念。墓地のモンスターを2体除外してこのターンの戦闘ダメージを0にする。俺はエッジマンとネクロダークマンを除外！」

「凄いだか。カードを1枚伏せてターンエンド。」

「俺のターン。」

！？このカードは……。

「カードを1枚伏せてターンエンド。」

このカードに未来を託す。

「俺のターン、このスタンバイフェイズ希望の転生の効果でデッキからモンスターカードを1枚手札に加える。俺はデブリ・ドラゴンを手札に加える。デブリ・ドラゴンを召喚。」

ATK / 1000

「デブリ・ドラゴンの召喚に成功した時、墓地から攻撃力500以下のモンスターを特殊召喚できる。レベル・ウォリアーを特殊召喚。」

ATK / 300

「さらに罫発動、エンジェル・リフト。墓地のLv2以下のモンスターを特殊召喚する。チューニング・サポーターを特殊召喚。」

ATK / 100

まずい！この展開は……。

「Lv3のレベル・ウォリアーとLv1のチューニング・サポーターにLv4のデブリ・ドラゴンをチューニング！集いし願いが、新たに輝く星となる。光差す道となれ！シンクロ召喚！飛翔せよ！スターダスト・ドラゴン！」

ATK / 2500

スターダスト・ドラゴン……近くで見ると綺麗だな……つて見とれてる場合じゃない！

ぐっ……分かってたけど……右腕の痣が……疼く……。

「いくぞ駆。ジャンク・ウォリアーで直接攻撃！スクラップ・フィスト！」

「畏発動！ガード・ブロック。戦闘ダメージを0にし、カードを1枚ドローする。」

「だがまだ攻撃は残っている。ニトロ・ウォリアーで直接攻撃！ダイナマイト・ナックル！」

「畏発動！屍の沼。相手攻撃モンスターの攻撃力を半分にする。」

ATK / 2800 1400

駆 LP 4500 3100

「スターダスト・ドラゴンで直接攻撃！響け！シューティング・ソニック！」

「ぐわあああ！」

駆 LP 3100 600

「耐えたか。俺はこれでターンエンドだ。」

はあ・・・はあ・・・何とか耐えた。そう簡単にこのデュエルを終わらすわけにはいかないしね。後は・・・、

「俺のターン！」

このカードに賭ける！

「カードを2枚伏せる。そして畏発動！希望の未来。手札が0の時、墓地のカードをすべてデッキに戻し、カードを2枚ドローする。」

お願い・・・来て。

「ドロー！」

・・・これじゃないけどまだ何とかなる。

「魔法カード弱者の贈り物を発動。手札のLV3以下のモンスターを除外してカードを2枚ドローする。俺はLV3のフェザーマンを除外して2枚ドロー！」

来た！これでいける。

「魔法カード平行世界融合を発動！除外されている融合素材モンスターをデッキに戻し、融合召喚する。」

「何！？」

これが俺の起死回生のカード。

「俺は除外されているフェザーマンとエッジマンをデッキに戻し融合！E・HERO Great TORNADOを融合召喚！」

ATK/2800

「TORNADOの効果発動！このカードが融合召喚に成功した時、相手フィールド上の全てのモンスターの攻撃力・守備力を半分にする。」

「何だと！」

ジャンク・ウォリアー ATK/3100 DEF/1300 650

二トロ・ウォリアー ATK/2800 DEF/1800 900

スターダスト・ドラゴン ATK/2500 DEF/2000 1000

「バトル！TORNADOでジャンク・ウォリアーを攻撃！スーパーセル！」

「ぐっ！」

TORNADOが起こした風によりジャンク・ウォリアーが破壊された。

遊星 LP4000 2750

「カードを1枚伏せてターンエンド。」

よし！やっと遊星のライフを削った。

「ふっ。やるな駆。」

「やればっばなしじゃ終われないからね。勝負はここからだよ遊星！」

「ああ、望むところだ。来い！駆！」

第12話 駆VS遊星（前編）遊星の猛攻（後書き）

どうでしたか？

今回は駆VS遊星後編です。

なかなか会話文が思いつかない今日このころ……。どうしよう。。。

ではご指摘やご感想お待ちしております。次回もお楽しみに。

第13話 駆vs遊星（後編）融合vsシンクロ（前書き）

（前回のあらすじ）

遂にはじまった駆と遊星の決勝戦。序盤は遊星のシンクロモンスター
Iの猛攻で駆のライフを大幅に削るが防戦一方だった駆がTORN
ADOを融合召喚し反撃開始！果たしてこのデュエルに勝ちジャッ
クとのスペシャルデュエルに駒を進めるのはどっちだ！

第13話 駆vs遊星(後編)融合vsシンクロ

駆vs遊星 フィールドの状況

駆 LP600

手札0枚

伏せカード3枚

E・HERO Great TORNADO ATK/2800

DEF/2200

遊星 LP2750

手札0枚

伏せカード0枚

スターダスト・ドラゴン ATK/2500 DEF/1250

2000 1000

ニトロ・ウォリアー ATK/2800 DEF/1800

00 900

(2体ともTORNADOの効果で攻守半分)

駆side

「俺のターン！」

なんとかフィールドでは逆転したが、俺のライフは残り600。下手すれば一撃で終わるライフだ。ましては相手は遊星。遊星ならこのぐらいすぐに逆転してくる。

「俺はスターダスト・ドラゴンとニトロ・ウォリアーを守備表示に変更。」

スターダスト・ドラゴン DEF/1000
ニトロ・ウォリアー DEF/900

「カードを1枚伏せてターンエンド。」

いくら遊星といえども手札がドローしたのだけじゃまだ無理か。なら遠慮なくいかせてもらう。

「俺のターン、ドロー！」

引いたのはモンスターじゃないか・・・仕方ない。

「TORNADOでスターダスト・ドラゴンに攻撃！スーパーセル！」

「畏発動！くず鉄のかかし。相手モンスター1体の攻撃を無効にする。」

TORNADOの攻撃はくず鉄で作られたかかしによって防がれた。

「さらに発動後このカードを再びセットする。」

ここにきてくず鉄のかかしか・・・やっかいだな。

「カードを1枚伏せてターンエンド。」

しかしこのデュエル、なかなかモンスターを引かないな・・・。

「俺のターン・・・カードを1枚伏せてターンエンド。」

遊星はまだ動けないみたいだね。

「俺のターン！」

またモンスターじゃない……。そのまま攻撃してもくず鉄のかか
しで防がれるだけ。

「俺はそのままターンを終了する。」

「俺のターン、俺はシールド・ウィングを守備表示で召喚し、ター
ンエンドだ。」

DEF / 900

またやつかいなモンスターを。あいつは1ターンに2度まで戦闘で
は破壊されないという優秀な壁モンスターじゃないか。貫通がある
なら話は別だが……。

「俺のターン！」

やっとモンスターを引いたか。

「レディ・オブ・ファイアを召喚。」

ATK / 1300

「バトル！レディ・オブ・ファイアでスターダスト・ドラゴンに攻
撃。」

レディ・オブ・ファイアから出された炎によってスターダストは破壊された。

くず鉄のかかしを使わなかったね。確かにTORNADOの方が攻撃力は高いからくず鉄は使わなくてもいいけど、それは俺も予想済み。

「TORNADOで二トロ・ウォリアーを攻撃。」

「畏発動！くず鉄のかかし。」

そう何度も使わせないよ。

「畏発動！エレメントの加護。自分フィールド上のE・HERO1体を除外し、相手の魔法・畏の発動を無効にし破壊する。」

「何！？」

さっきはスターダストがいたから使えなかったんだよね。

「俺はレディ・オブ・ファイアを除外し、くず鉄のかかしを破壊する。」

「くっ！」

「バトル続行！」

TORNADOが出した風で二トロ・ウォリアーが破壊された。

「エンドフェイズにエレメントの加護で除外されたレディ・オブ・

ファイアが戻る。そしてレディ・オブ・ファイアの効果を発動。エンドフェイズに自分フィールドに存在するE・HERO1体につき200ポイントのダメージを与える。俺の場にE・HEROは2体よって400のダメージを受けてもらうよ。」

遊星 LP2750 2350

「これでターンエンド。」

「俺のターン！・・・ふっ。」

笑った！？何かキーカードでも引いたのか。

「俺はロード・シンクロンを召喚。」

ATK/1600

「さらに畏発動、リミット・リバース。墓地の攻撃力1000以下のモンスターを特殊召喚する。よみがえれ！チューニング・サポーター！」

ATK/1000

チューニング・サポーター・・・このデュエル3回目の登場。お疲れ様です・・・って言ってる場合じゃない！

「チューニング・サポーターはシンクロ素材となる時、Lvを2として扱うことができる。Lv2となったチューニング・サポーターとLv2のシールド・ウイングにLv4のロード・シンクロンをチューニング！集いし希望が、新たな地平へ誘う。光差す道となれ！

シンクロ召喚！駆け抜ける！ロード・ウォリアー！」

ATK/3000

「チューニング・サポーターの効果で1枚ドロ。バトル！ロード・ウォリアーでレディ・オブ・ファイアを攻撃！」

まずい！このままじゃ負ける！

「畏発動！ディフェンド・ヒーロー。攻撃対象を別のHEROに変更できる。TORNADOに攻撃対象を変更。くっ！」

駆 LP600 400

「俺はこれでターンエンドだ。」

「俺のターン。」

・・・モンスター引く確率低いなあ。こんなときもあるか。

「俺はレディ・オブ・ファイアを守備表示に変更。」

ATK/1300 DEF/1000

「カードを1枚伏せる。エンドフェイズ、レディ・オブ・ファイアの効果発動。俺の場にE・HEROは1体。よって200ポイントのダメージを与える。」

遊星 LP2350 2150

「ターン終了。」

「俺のターン、俺はロード・ウォリアーの効果を発動。1ターンに1度デッキからLv2以下の戦士族または機械族モンスターを1体特殊召喚できる。俺はスピード・ウォリアーを特殊召喚。」

ATK/900

「バトル！ロード・ウォリアーでレディ・オブ・ファイアを攻撃。」

ロード・ウォリアーの爪でレディ・オブ・ファイアは破壊された。

「スピード・ウォリアーで直接攻撃！」

くっ、これを防ぐにはこれしかない！

「速攻魔法クリボーを呼ぶ笛を発動。デッキからハネクリボーを特殊召喚。」

DEF/200

「ソニックエッジ！」

スピード・ウォリアーの回し蹴りでハネクリボーが破壊された。

「カードを2枚伏せてターンエンドだ。」

「俺のターン！俺は魔法カード発掘作業を発動。手札を1枚墓地に送り、カードを1枚ドローする。」

！？このカードは・・・これに賭けるしかない。

「俺は魔法カード融合誕生を発動。デッキの上からカードを5枚墓地に送り、その中に融合素材が揃っていれば融合召喚できる。」

「何！？」

「墓地に送られたのはスパークマン、バブルマン、ヒーローシグナル、増援、フェザーマン。俺はスパークマンとバブルマンとフェザーマンを融合！現れる！E・HEROテンペスター！」

ATK/2800

「バトル！テンペスターでスピード・ウォリアーを攻撃！カオステンペスター！」

テンペスターから出された光線でスピード・ウォリアーは破壊された。

遊星 LP2150 250

「俺はテンペスターの効果発動。俺の伏せカードを墓地に送ること
でテンペスターは戦闘によっては破壊されなくなる。ターンエンド。」

これで次のターンロード・ウォリアーの攻撃されても俺のライフは
余る。テンペスターの攻撃力を超えるモンスターが出ない限り俺は
耐えられる。

「俺のターン！俺はジャンク・シンクロンを召喚。」

ATK / 1300

2枚目だと!?しかもこの状況で引き当てるなんて……。

「ジャンク・シンクロンの効果でスピード・ウォリアーを特殊召喚。

」

DEF / 400

「さらにロード・ウォリアーの効果でニトロ・シンクロンを召喚。」

ATK / 300

またシンクロ召喚!?このデュエル何回目だよ。

「Lv2のスピード・ウォリアーにLv2のニトロ・シンクロンをチューニング!シンクロ召喚!いでよ!アームズ・エイド!」

ATK / 1800

「さらにLv4のアームズ・エイドにLv3のジャンク・シンクロンをチューニング!集いし叫びが、こだまの矢となり空を裂く。光差す道となれ!シンクロ召喚!いでよ!ジャンク・アーチャー!」

ATK / 2300

ここにきてジャンク・アーチャー……。

「ジャンク・アーチャーの効果発動!1ターンに1度相手モンスター

ーをエンドフェイズまで除外できる。俺はテンペスターを除外する。デイメンジョン・シュート！」

ジャンク・アーチャーから放たれた矢によりテンペスターは除外された。

そう・・・俺の・・・

「ジャンク・アーチャーで駆に直接攻撃！スクラップ・アロー！」

・・・負け・・・。

駆 LP4000

駆と遊星の対決は遊星に軍配が上がったのであった。

第13話 駆vs遊星（後編）融合vsシンクロ（後書き）

どうでしたか？

今回から前書きに前回のあらすじを書いてみました。

次回は遊星vsジャック。といってもかなり飛ばし飛ばしになると
思います。

それではご指摘やご感想をお待ちしています。次回もお楽しみに。

第14話 赤き龍が導く未来 フォーチュン・カップ決着！（前書き）

（前回のあらすじ）

フォーチュン・カップ決勝戦 駆 vs 遊星。TORNADOで反撃を開始した駆だが、その後は一進一退の攻防となり、テンペスターで遊星のライフを大幅に削るもののジャンク・アーチャーでテンペスターを除外されてしまい、駆は無念の敗北を喫することになった。

第14話 赤き龍が導く未来 フォーチュン・カップ決着！

馭side

「決着！フォーチュン・カップ決勝戦、一進一退の攻防を制し、ジヤックとのファイナルデュエルに駒を進めたのは、不動遊星だー！」

「負けたか・・・さすが原作主人公・・・強い・・・。」

「いいデュエルだったな。」

「いつの間にか遊星が目の前にいた。」

「うん。楽しいデュエルだった。でも次は負けないよ。」

「ああ。楽しみにしている。」

「そうやって俺と遊星は握手をした。」

その後、俺と遊星は龍可たちのところに合流した。そこで・・・、

「皆、早くこの会場から出るんだ。」

「しかしあんちゃんはキングとの対決があるだろ？」

「この会場にはシグナーが4人いる。これ以上シグナー同士で戦うのは危険だ。俺とアキのデュエルを見てて分かるだろう。」

本当は5人だけどね。俺も痣があるから。まだ誰も知らないと思うけど……いや、ゴドウィンはもう気づいてるかも。

「でも、遊星のお友達が……。」

「ゴドウィンとは俺が話をつける。みんなは早くここから離れる。」
そう言って遊星はゴドウィンのところに走って行った。

「あんちゃんがああ言ってるんだ。わしらも退散するとしよう。ちよっと残念だけどね。」

ということでは会場を出る俺たち。ま、あいつらが出させてくれないと思うけどね。

と思った瞬間、案の定変な奴らに取り囲まれた。そして……、

「ヒッヒッヒッヒッヒ。」

不気味な笑い声とともにイエーガーが姿を現した。……その笑い声はなんとかならないのか？

「お前は……。」

「残念ながらあなたたちを帰すわけにはまいりません。ヒッヒッヒッヒッヒ。」

「なら腕すくで通らせてもらおう!」

と言つて氷室がイエーガーの胸ぐらを掴んだがイエーガーが何かを言つた途端氷室が驚き、舌打ちをして手を離した。

「仲間想いのあなたがたのことだ、そんなことはできませんね。さあ、早く席にお戻りください。」

これに従い、俺たちは席に戻る。ま、氷室が言われたのは遊星の友達のことだろうけど、すぐに解放されることになるんだよね。

だから、あの場を強行突破することもできたんだよね。この時計型麻醉銃を使えばね。・・・あ、この時計型麻醉銃はある日俺の鞆の中に入つてたんだ。一緒に神と名乗る奴からの手紙が入つてたけど、自由に使つていいとのこと。他にはデュエルディスク型麻醉銃や蝶ネクタイ型変声器とかが入っていた。・・・どっかのアニメじゃあるまいし・・・。

ともかくこれと俺の武術で突破することも可能だったけど、遊星vsジャックのイベントはこのアニメでは重要だからね。だから、ここは素直に従うことにしたつてわけ。

その後、遊星vsジャックのファイナルデュエルが始まった。

デュエルは一進一退の攻防だったがジャック優勢で進んでいた。

そしてジャックのレッド・デーモンズ・ドラゴンと遊星のスターダスト・ドラゴンが激突した時、遂にその時が来た。

そう、赤い雷とともに赤き龍が姿を現した。

会場は騒然としている。そりゃそうだろうね。誰も召喚してないはずのモンスターが現れたんだから。

「何？痣が・・・熱い・・・。」

龍可の痣が輝きだした。

「大丈夫龍可？」

「・・・うん。大丈夫。」

「そう。ぐっ！・・・。」

俺の痣も輝きだしたか。

「か、駆！？その痣、もしかして。」

「そう、赤き龍の痣だよ。」

「う、嘘！？駆が5人目のシグナーだったの？」

「たぶんね。」

5人目ではなく6人目だろうけどね。5人目の痣はおそらくは・・・ぐっ！また痣が・・・。横を見ると龍可も同じような状況だった。

その時、赤き龍から突風が発生し、俺の目の前は真っ白に・・・。

気がつく俺は赤き龍が作り出した空間にいた。俺のまわりには赤い膜がおおっていて、目の前の光の道を走る遊星とジャックについて行っている。

「やっぱりここに連れてこられたか。」

ふと周りを見ていると俺と同じように赤い膜でおおわれた龍可とアキがいた。

「龍可！」

「駆！ここはどこ？」

「多分、赤き龍が作り出した空間だと思う。」

多分じゃなくてそうだけどね。

すると、目の前に祭壇が見えてきた。そして祭壇の下の方にたくさんの人々が跪いて何かをお願いしている。また、上の方では6人の人が手を大きく広げていた・・・6人！？原作では5人だったはずじゃ！まさか・・・、

と思い、すれ違いざまによく見ると、6人の腕に龍の痣があり、その中に俺が持っている痣もあった。

「やっぱり……。」

祭壇を過ぎていくと今度はネオドミノシティとサテライトが現れた。

「あれは……ネオドミノシティとサテライト！」

だが、サテライトの所々に青い炎が出てきて、建物が崩壊していった。

「何!?! どうしたの?！」

と龍可が言ってるうちに青い炎は蜘蛛の地上絵の形になった。

「これが……未来……。」

「これが未来なの!?! じゃあサテライトは滅びる運命にあるってこと?！」

「今のところはね。でもそれは俺達次第で変わる。」

「変わるんだ。なら良かった。」

龍可、ホツとしているようだけど、それはあなたも入ってるからね。

デュエルの方は続行するようになったらしくジャックが2枚カードを伏せてターンエンドした。

デュエルはまたも一進一退の攻防だったが、逆転で遊星が制した。そして決着がついた瞬間、また目の前が真っ白になり、気がつく与会場に戻っていた。

会場の俺と龍可以外の人は何が起きてるか分からないみたいになっていた。

「何が起きた？」

「赤い龍が飛んだと思ったら、目の前が光になっちまったよ。」

「あ、あれ見て！」

龍亞が指している方を向くとジャックのライフが0になっていた。

「ジャックのライフが。」

「このデュエル・・・遊星が勝ったわ（よ）。」「

「「ええ！」」

周りのみんなは驚いてるね。そりゃそうか。キングが負けたんだから。

「つ、遂に決着！ウイナー！不動遊星！キングのジャック・アトラスの無敗神話は打ち破られ、ここに新たなキングの誕生を我々は見ろ！新たななるキング！その名は不動遊星！ニューキングは不動遊星！サテライト出身のキングの誕生だ！」

ということではフォーチュン・カップは遊星がキングになるといふ波
乱の展開（アニメ的には普通だが。）で幕を閉じた。

第14話 赤き龍が導く未来 フォーチュン・カップ決着！（後書き）

最初に遊星vsジャックのデュエルを飛ばしてすみません。詳しく見たい人はアニメ5D'sの第25話、26話をご覧ください。

次回は・・・未定です。すみません。多分駆が精霊世界に行く話になると思います。

では、ご指摘やご感想お待ちしております。次回もお楽しみに。

第15話 駆の新しい力 シグナーの龍が明らかに（前書き）

今回は本当にぐたぐたな文になりました。

今回からオリカがです。といっても今回デュエルはないので精霊としての登場だけですけどね。ご了承ください。

（前回のあらすじ）

フォーチュン・カップ決勝で遊星に敗退した駆は、そのままスタンドで遊星vsジャックのデュエルを観戦。赤き龍の空間に飲み込まれたりとハプニングは起こったがデュエルは激しい死闘のすえ、遊星に軍配があがり遊星がキングとなったのであった。

第15話 駆の新しい力 シグナーの龍が明らかに

駆 side

俺は今スタジアムの地下にいる。あの後、遊星に記者達が殺到し、この地下を使って辛くものがれたというわけだ。

「それにしてもすげえぜあんちゃんよ！本当にキングになっちまうんだからな。」

「遊星なら必ずキングになるって信じてたよ！」

「うんうん。」

まあ、遊星の実力ならキングになっても不思議じゃないと思うけど。

「そんな呑気な事も言ってもらえないぞ。遊星の仲間を誘拐した連中だ。何をしてくるかしたもんじゃねえ。」

確かにね。

「とりあえずは雑賀の隠れ家で大人しくしてるしかねえな。龍亞と龍可と駆も一緒にいた方が安全だろう。」

「本当！？やったー！また遊星と一緒にいられる！」

喜んでるな龍亞。それに対して龍可は……。

「遊星・・・私見てた。遊星とジャックのデュエルをあの光の中で。」

「え？」

「サテライトが・・・その・・・」

蜘蛛の地上絵が出たあの映像のことだね。

「あれはいつたい・・・。」

「わからない。ただ、あの光景がサテライトの未来なら絶対に阻止する。」

「・・・シグナーって何なの？」

「じゃ〜ん！そういう話はわしの出番だ！良いかい龍可ちゃん、シグナーってのは・・・おっと！その前に世界を股に掛けたわしの冒険の数々を話せばならんの！いひひひひひ。」

その後、雑賀の隠れ家に着いた駆達は本題の赤い竜の話聞いていて、矢薙のじいさんが赤い竜の痣の集合体の絵を描いていた。

「もう随分と昔の話になるからな〜。うる覚えだがこんな感じだ。」

完成した絵を見るとそこには原作通りの絵が出来上がっていた。だが1つ違うところがあった。それは、

「（俺の痣もある・・・。）」

そう、本来なら龍亞が覚醒した後に出るはずの6人目の痣がすでに描かれていた。

「この尻尾が・・・。」

「どうしたの遊星？」

遊星は皆に自分の痣を見せた。

「「「「ああ！」「」「」」

それは絵の尻尾にあたる部分と同じ痣だった。

「龍可、お前のも。」

龍可も自分の痣を皆に見せた。

「龍可はこの手の部分・・・どういう事なの？」

「わしが聞いた星の民の伝説では、赤い竜の頭、翼、手、足、尻尾の5つの部分がそれぞれ別れてシグナーと呼ばれる人達に痣となつて封印されたの事じゃった。」

「待てよ・・・今わかつてるシグナーは遊星、龍可、ジャック、それに十六夜アキの4人、でもあの赤い竜が現れたって事は・・・。」

「5人目もどこかにいたのかもしれないの？」

「その5人目って駆のことじゃないの？」

「「「「え？」「」「」」

全員驚いてるね。そりゃそうか。龍可とアキさん以外は誰も知らなかったんだし。

「駆もシグナーだったの!？」

「うん。でも俺は残ってる頭の痣じゃなくて、この手の部分にあるこの痣だよ。」

そう言っつて自分の痣を皆に見せた。

「これは・・・わしが知ってる限りじゃこんな痣は知らんの。」

「これって俺は5人目じゃなく6人目のシグナーなんじゃない？」

「そうかもな。」

ていうかそうなんだけど。ま、知らなくても無理ないか。

「俺もどっかに痣がないかな。」

龍可は痣がないか体中を調べている。ていうかみんな右腕にあるんだから右腕を調べれば十分だと思うんだけど・・・。

そんなこと思っつると、龍可が突然倒れそうになったが矢薙のじいさんがなんとか支えた。

「どうした龍可!？」

「大丈夫。ちょっと疲れただけ。」

「無理もないな。この2日はいろいろありすぎたからな。」

確かにね。って思っていると俺もふらふらっとなった。

「駆!？」

そのまま俺の精神は昨日と同じく強制的に精霊世界へと旅立った。

「・・・またここか。」

目が覚めるとそこは昨日来た時と同じヒーローシティにいた。

「クリクリー」

横にはハネクリボーもいる。そして、

「ようこそマスター。」

前回出迎えてくれたフェザーマンとスパークマンもいた。それにしても、

「昨日から思ってたが何故俺がマスターなんだ？」

「それはもちろんマスターがHERO使いだからです。」

そういうこと。でも、

「HEROデッキ使ってる人なんて他にもいるんじゃないの？」

「いいえ。マスターのほかにはいません。私達の精霊のデッキを使ってる人は。」

「は！？俺のHEROデッキって精霊が宿ってるの？」

「はい。だが、人間界で実体化できるのはそこにいるハネクリボーとごくわずかな精霊だけです。なので私達みたいな人達はこの精霊界でしかマスターと会うことはできないのです。」

へえ〜。そうなんだ。

「ところでなぜ俺はここにいる？」

「それは、私があなたをここに呼びました。」えっ？

フェザーマンとスパークマンの後ろからエリクシーラが現れた。

「私がこの王であるエリクシーラです。」

・・・王か・・・。確かに4体融合の上に元々の攻撃力が一番高いから妥当だけど・・・正直デュエルであんまりでないんだよなあ。

「で、俺をここに呼んだ理由は？」

「それは城で話をします。ついてきてください。」

城？ここにそんなものがあるのか？見たところそんなものは見当た

らないが……。

とりあえずエリクシーラについて行っているが、行く先々でHEROたちが俺に尊敬の眼を向けてくる。俺がこいつらを使ってるからか？

しばらくするとヒーローシティのど真ん中にその城はあった。そしてその中に入った。すると、

「「「お待ちしております。マスター。」」」

……見たことないやつが俺を待っていた。3人とも妖精みたいなやつだ。3人とも似ているがちよつとずつ違う。まずは、

「私はE・HEROエンジェル・シャイアの精霊です。」

こいつは髪の色が黄色い。

「私はE・HEROエンジェル・ウィングの精霊です。」

こいつは髪の色が緑色だ。こいつだけ翼が大きい。

「私はE・HEROエンジェル・アルドの精霊です。以後お見知りおきを。」

こいつは髪の色が青色だ。こいつだけ妖精のくせに杖を持っている。って説明してるけどなんだこいつら？

「マスターにはこの3人のカードを渡そうと思ひまして来てもらい

ました。」

そう言っつて渡される4枚のカード・・・4枚？

「ああ、1枚はこの3人に関係する融合モンスターです。」

なるほどね。しかしこの融合モンスターは結構使えるかもな。そして後の3枚は・・・って！

「ちゅ、チューナー！？」

そうこいつらはE・HEROのチューナーモンスターだった。」

「そうですよ。」

「じゃあE・HEROのシンクロモンスターっているの？」

「残念ながらそれはいません。」

いないんだ。ま、いつか。しっかしよく効果をみているところもなかなか使える。これはおもわね戦力アップだな。

「ちなみに私達は人間界でも実体化できるのでマスターについて行きます。」

え？

「」「」とついでマスターよろしくお願いします。」「」

あはははは・・・賑やかになりそうだな。ま、龍可が喜びそうかな。

「まっ、いつか・・・っ！」

いきなり痣がひかりだした。もう遊星がダークシグナーと戦ってる
ってことかな。

「！？マスター、その痣は・・・まさかマスターがシグナーだったと
は。」

「・・・どうしたの？」

「しかもその痣ということはマスターがムーン・ライト・ドラゴンの
本当の所持者。」

！？ムーン・ライト・ドラゴン？

「それが俺が救うドラゴンの名前なの？」

「そうだ。」

月光の龍か。ていうか名前そのまんまじゃん。

「本来なら今すぐにも救いに行ってもらいたいのだが、時期的に
今は駄目だ。時期が来たらまた呼ぶ。」

「呼ぶのはいいけどいきなりはやめてくれ。」

「・・・分かった。その時はアルドに連絡しよう。」

「助かる。」

・まったくいきなりここにくるのは嫌だよ。龍可たちも心配するだろうし。って俺、確か倒れてそのままこっちに来たから今現在龍可たちが心配してるじゃん。

「人間界のことが心配か。」

心を読まれた!?

「まあ、もう用は終わったしいつでも人間界に帰ってもいいぞ。」

「でもどうやってか……。」

そこで俺の精神は人間界へと帰って行った。

「……戻ったか。」

それにしてもいきなり戻すなよなあ。

「起きたんだね。」

ふと隣を見てみると龍可がいた。って、一緒に寝てたってこと?

「……心配かけたみたいだね。」

「うん。っていつても私も起きたのはついさっきだけどね。」

外を見てみるともう朝だった。

デッキを見てみると精霊界で渡された4枚のカードがちゃんと入っていた。デッキ組み直すか。

『・・・私達のこと忘れてません？』

「・・・いたんだ。」

気配がないから気付かなかったよ。

「うわ〜、妖精みたい。駆の新しい精霊？」

「うん。実は寝ている間に精霊界に行つてその時貰ったんだ。みんな、龍可に挨拶して。」

『うん。エンジェル・シャイアです。よろしく〜。』

『エンジェル・ウイングです。よろしく。』

『エンジェル・アルドです。よろしくお願いします。』

「うん、よろしくね。それにしても可愛いー！」

あはは、本当に嬉しそうだな。

と、こんな感じで駆は新しい力を手に入れたのだった。

第15話 駆の新しい力 シグナーの龍が明らかに（後書き）

どうでしたか？

ぐたぐたな文章ですみません。全然思いつかなくてこんな感じになっ
てしまいました。

オリカのほうはデュエルで出てきしだいこの後書きのほうで紹介さ
せていただきます。

今回はアルカディアムーブメントに突入。駆がみんなを守るために
動き出す！？

それではご指摘やご感想をお待ちしています。次回もお楽しみに。

第16話 突入！アルカディアムーブメント V・HERO降臨！（前書き）

お待たせしました。第16話です。

駆がちょっと暴れます。

（前回のあらすじ）

フォーチュン・カップ終了後、突如精霊世界に連れて行かれた駆。そこでHEROのチューナーという新しい力を手に入れた駆。精霊も駆について行き、賑やかになったところでダークシグナーが暗躍を始める？

第16話 突入！アルカディアムーブメント V・HERO降臨！

馭side

・・・はい。ただいま何故かアルカディアムーブメントにいる馭です。

何故アルカディアムーブメントにいるかというと、龍亞がアキさんに協力してもらおうよって言い出し、俺と龍可以外の人がみんな賛成に、俺と龍可もしぶしぶついてきたというわけです。

ま、いいけどね。これからアルカディアムーブメントを殲滅しようと思っていた俺には好都合だね。だけど他の人は巻き込みたくなかったなあ。ま、いつか。

「面白い話ですね。そのダークシグナーと呼ばれる連中がこの童実野シテイを狙っていると。」

で、今ディヴァインが目の前にいて龍亞が話をしている。

「そう！そいつらと戦うためのシグナーなんだ！だからアキ姉ちゃんのを力を貸して欲しいんだ。きっと同じ痣を持っているお姉ちゃんなら遊星を助けられるよ。」

「それで、遊星君からの連絡は？」

「まだだ。」

「んっ・・・良いでしょう。我々の力を全面的にお貸ししましょう。」

「本当!?!」

あらら・・・龍亞以外びっくりしてるよ。ま、こんな簡単に承諾されるとは思ってもみなかっただろうからね。

「アルカディアムーブメントは純粹にサイコデュエルの研究を行っているのですが、最近は変な噂を立てられて困っていたのです。我々が皆さんのお役に立てるなら喜んで。」

「やった!」

「良かった!」

「そつだ!彼女を呼びましょう。すぐに戻ります。失礼。」

そう言つて龍亞は出て行つた。

「どうよ!俺の思った通り。あの人悪い人じゃないって!」

「こんなにトントン拍子で話が進むとはの〜。」

「意外だな。だが油断しない方がかも良いかもしれん。」

「ああ〜あ〜やだやだ、大人は疑い深くつて。」

「それより料理は?俺お腹減っちゃつた!」

「龍亞、静かに座つて。」

と言った瞬間部屋に催涙ガスが充満し、俺以外の全員が眠ってしまった。

その時、扉が開き、マスクをつけたダイヴァインと隊員4人が入ってきた。

「！？何故お前は眠っていないんだ？」

ダイヴァインは俺が起きてることに驚いてるようだ。

「催涙ガスなんか俺に通用するとも？」

と返しておいた。ま、催涙ガスは前の世界で何度もやられたからね。耐性がついたみたい。

「まあいい。ならこれで眠ってもらおうか。」

と言って俺にサイコパワーでファイアーボールを当ててきた。ただ、

「だからそんなんじゃあ俺は倒せないよ。」

いやあ、それ以上のやつを食らったことがあるからね。この程度は平気だよ。

「あれを耐えるか。なら力づくでもお前を眠らせてもらおうか。行け！お前ら。」

そう言っつて隊員4人が俺に突っ込んできた。しかし、

（10秒後）

隊員4人の屍がそこに転がっていた。武術も多少心得てるからね。

「何！？お前何者だ？」

「何者って俺はただの中学生だけ。」

嘘つけという突っ込みはなしね。

「くっ！なら俺とデュエルしてもらおうか。」

「別にいいですよ。」

最初からそのつもりだったけどね。

「まあお前もサイコパワーがあるか確かめたいところだったからな。好都合だな。」

もしかして俺をアルカディアムーブメントに入れるつもりか？入る気はさらさらがないがな。ていうか今から潰れるところに誰が入るかっつーの。

「ではいくぞ。」

「「決闘！」」

駆 LP4000

ディヴァイン LP4000

「私のターン、私はクレボンスを召喚。」

ATK/1200

「カードを1枚伏せてターンエンドだ。さあかかってくるがいい。」

「様子見ですか？」

「さあね。さあ、あなたの力を見せてみる。」

「じゃあ要望通りに。俺のターン。」

何だこの手札は？このターンで終わらせるといつてるようなもんだ。

さてまずはあのリバースカード、原作なら龍亞戦の時はバトル・テレポートーションだったけど……。

「手札から速攻魔法サイクロンを発動。そのリバースカードを破壊する。」

「何!？」

破壊されたのは……次元幽閉だと!？危ねえ。ま、これで俺の勝ちが確定かな。

「さてこのターンであんたを終わらすよ。」

「何!?!キル宣言だと!?(それは無理だクレボンスは800ポイントライフを払うことで攻撃を無効にすることができる。このタ

ーンで決着をつけることは不可能だ。」

「俺は融合を発動。手札のワイルドマン、スパークマン、オーシャンを融合。現れる！V・HEROトリニティー！」

ATK / 2500

「3体融合だと!?!」

「トリニティーは融合召喚に成功したターン攻撃力が倍になる。」

「何だと!?!」

いちいち驚きすぎだよ。

ATK / 2500 5000

「バトル！トリニティーでクレボンスに攻撃！」

「クレボンスの効果発動。このカードが攻撃対象になった時、80ポイントライフを払うことで攻撃を無効にすることができる。」

デイヴァイン LP4000 3200

「これで1キルはなくなったな。」

「何勘違いしてんの？第一、クレボンスの効果ぐらい知ってるし。トリニティーは1度のバトルフェイズに3回攻撃ができる。」

「何!?!」

だからいちいち驚きすぎだつて。

「いけ！トリニティー！2回目の攻撃。」

「クレボンスの効果発動。」

ダイヴァイン LP3200 2400

「3回目の攻撃。」

「クレボンスの効果発動。」

ダイヴァイン LP2400 1600

「さあこれで攻撃はしゅう」「速攻魔法融合解除発動！」何!?!」

スパークマン ATK/1600

ワイルドマン ATK/1500

オーシャン ATK/1500

「バトル続行！オーシャンで攻撃！」

「くっ！クレボンスの効果発動。」

ダイヴァイン LP1600 800

「これでクレボンスの効果はもう使えない。いけ！ワイルドマン！ワイルドスラッシュ！」

「くっ！」

デヴィヴァイン LP800 500

「これで最後だ！スパークマンで直接攻撃！スパークフラッシュ！」

「ぐわあああ！」

デヴィヴァイン LP500 0

はい。この世界で初の1キル達成。弱いなこいつ。

「くそ……だがこれで終わると思うんふにやふにや……。」

麻醉銃を当ててやった。つたく、またファイアーボールを当てようとしたらこいつ。

『見事でしたね。駆。』

アルドが話しかけてきた。

「まあね。ところでその敬語口調はなんとかならないのか？」

あの後、精霊にマスターと呼ばれるのは恥ずかしいから普通に駆って呼んでいいぞって言って、ついでに敬語口調じゃなく普通に話しかけていいからと言ったんだが、アルドだけはまだ敬語口調になっている。

『……努力します。』

精霊世界ではシャイアとウイング以外この敬語口調が主に使ってたらしいからな。しょうがないか。

「・・・あれ？俺は寝てたのか？」

氷室さんが起きたようだね。

「駆、これは何だ？」

「こいつら催涙ガスで眠らせて龍可と俺をアルカダイヤモンドに入れ、氷室さんたちはどこかに閉じ込めるつもりだったんですよ。」

「何！？やっぱり油断ならん奴らだな。ところでお前はどのようにして眠ってない？」

「催涙ガスなんて俺には効きませんよ。」

「・・・そうか。何か納得できないがこの際どうでもいいだろ。で、こいつらはお前がやったのか。」

「はい。4人は気絶しててディヴァインはデュエルで片した後、麻酔銃で眠らしました。」

「麻酔銃って・・・まあいい。」

「とにかくこの3人を起こしてここから脱出しましょう。」

「そつだな。」

その後、他の3人を起こし、さっきの説明をし、ここから脱出を試みた。

が、

「あなた達は……。」

逃げる途中でアキさんに出会ってしまった。ってちょうどいいか。この人が目的なんだし。

「どうしてここに？」

「アキ姉ちゃんに協力してもらったためだよ。」

「協力？」

と龍亜がアキさんを説得してたが、

「ここにいたのね。」

ダークシングナーとなったミスティが現れてしまった。

く同じころアルカディアムーブメント内ディヴァインの部屋く

「ではさらばだ。いけ！サイココマンダー！」

「きゃあああああ！」

カーリー LP4000

「う．．そ．．。」

カーリーはビルから転落し、死んだかに見えた。が、

紫色の何かがカーリーを包み込み、カーリーはダークシグナーとなった。

ここアルカディアムーブメントでダークシグナーが暗躍する。

第16話 突入！アルカディアムーブメント V・HERO降臨！（後書き）

どうでしたか？

今回はアキとミステイのデュエルを描くつもりです。原作とはちょっと変える予定です。

ではご指摘やご感想お待ちしております。次回もお楽しみに。

第17話 ダークシグナー暗躍！憎しみの炎（前書き）

お待たせしました。第17話です。

パソコンの調子がかなり悪くてちょっと投稿が遅れました。

では第17話の始まりです。

（前回のあらすじ）

アキに協力を求めるため、アルカディアムーブメントに行った駆達だが、デイヴァインの罠で駆以外が眠ってしまった。だが、駆は罠をもるともせず、デュエルでデイヴァインを打ち破った。危険だからと逃げようとする最中にアキと出会った駆達だがそこにダークシグナーのミスティが現れてしまった。そしてデイヴァインにより殺されたはずのカーリーは……。今、アルカディアムーブメントでダークシグナーの暗躍が始まる。

第17話 ダークシグナー暗躍！憎しみの炎

馭side

そんな馬鹿な！何故ミスティが現れる！？確かミスティが現れるのは地震の後だったはず。なのに何故・・・？

その時、建物が揺れ、地震が起こった。

「な、何だ！？」

「遂に目覚めたのね。カーリー。」

そうミスティがつぶやいたのを聞いたのは俺だけだった。

「何なんだ今の地震は！？みんな大丈夫か？」

「うん。大丈夫だよ。」

「こっちも大丈夫よ。」

「そうか。」

それにしてもミスティが現れるのが早いのは何故？やっぱりイレギユラーの俺が来たからか？

だとしたらもう遠慮することはないね。早くミスティに真実を伝えなきゃ。

↳その頃アルカディアムーブメント内ダイヴァインの部屋↳

カーリーと対峙するダイヴァイン。

「そんな馬鹿な・・・あの高さから落ちて無事なはずは・・・。」

「ダイヴァイン・・・私はお前を葬るために蘇った。」

「何だと!？」

「この痣が疼くのか・・・薄汚いお前の魂を生贄にしるとね。受けるがいい・・・私の闇のデュエルを。」

「闇のデュエルだと?」

その時、カーリーの痣が光だし、カーリーを包み込んだ。

「な、何だ!？」

そして中からダークシングナーとなった姿のカーリーが現れ、笑いながらデュエルディスクを起動する。

「貴様がどんな仕掛けで無事だったかは知らんが、私にデュエルを挑んでくるとは身の程を知らないおるか者だな。」

「ほざきなよダイヴァイン。今度はさっきのようにはいかないよ。」

貴様の腹の底に渦巻く欲望ごとお前を闇の世界に放り込んでやる！」

「わけのわからんことを。いいだろう、受けてやる貴様のデュエルを。もう1度とくと味わえ！サイコデュエルの力を！」

「「決闘！」」

ダイヴァインとカーリーの闇のデュエルが始まった。

駆side

「私はアルカディアムーブメントを潰しに来た。あなたは私と戦うしか道はない。」

「いいわ。あなたが私の何を恨んでるかは知らないけど、相手になつてあげる。」

そう言つてアキさんは壁の穴からデュエルディスクを取り出し、セツトした。

「ここが私の帰るべき場所。ここをなくすというなら、あなたとは戦うしかない。」

え？話が飛びすぎだつて？詳しくはアニメ5D'sの第38話を観てね。まあ簡単に説明するとミスティが復讐とか言つてアキさんにデュエルを挑んだ。ただそれだけだよ。簡単に説明しすぎたかな？

ってそんなこと言ってる場合じゃない。早くミステイに真実を伝えなきゃ。でも2人ともデュエルディスクを起動している。なら、

「待つて！そのデュエル俺もやる。」

「駆！？」

俺自身もこのデュエルに加わるしかない。

「・・・あなたはフォーチュン・カップで決勝に進出した山岸駆ね。いいわ2人でかかってきなさい。あなたもシグナーみたいだし。」

「あなた・・・何故？」

「もちろんアキさんを助けるためだよ。」

ということにしておこう。本題は違っけどね。

「助ける？私みたいな化け物を？」

「あなたは化け物じゃない。それよりデュエルが始まりますよ。」

「・・・。」

「いくわよ。」

「」「決闘！」「」

アキ&駆 LP4000

ミステイ LP4000

(順番はアキ ミステイ 駆 ミステイの順です。アキと駆の場は共有です。ほとんどTFと同じと思ってくれればいいです。)

「私のターン、夜薔薇の騎士を召喚。」

ATK/1000

「夜薔薇の騎士の効果発動。このカードが召喚に成功した時、手札からLv4以下の植物族モンスターを特殊召喚できる。現れよ！ロード・ポイズン。」

ATK/1500

「Lv4のロード・ポイズンにLv3の夜薔薇の騎士をチューニング！冷たい炎が世界の全てを包み込む、漆黒の花よ開け！シンクロ召喚、現れよ！ブラック・ローズ・ドラゴン！」

ATK/2400

いきなり飛ばしてるねアキさん。ただ、ダークシグナー相手にそれが通用するか……。

「ブラック・ローズ・ドラゴン……十六夜アキ、これがあなたがシグナーである証。」

「私はカードを3枚伏せてターンエンド。」

「私のターン、手札からフィールド魔法サベージ・コロシウム発動。」

あたりの風景がコロシウムに変化した。

「このカードがある限り攻撃表示モンスターは攻撃しなければなら
ない。そして戦闘したモンスター1体につきプレイヤーは300ポ
イントライフを回復する。更に私はもう1枚永続魔法を発動。フィ
ールドバリアの効果により、フィールド魔法を破壊すること、新た
なフィールド魔法を発動することはできない。」

「（フィールド魔法を守るカード？）」

なるほどね。地縛神を使うにはフィールド魔法が必要だからフィー
ルド魔法を守るには最適のカードってわけね。

「私はレプティレス・ゴルゴーンを召喚。」

ATK/1400

げ！そういえばミスティが使うカードってレプティレスだっけ。忘
れてた……。

「そして手札から装備魔法アタック・フェロモン。このカードを装
備したモンスターが相手モンスターを攻撃した時、そのモンスター
の表示形式は攻撃表示となる。私はこのカードをレプティレス・ゴ
ルゴーンに装備。更に新たな装備魔法モルディング・エスケープを
発動！このカードは1ターンに1度装備した爬虫類族モンスターを
バトルの破壊から守ることができる。そしてこの効果を使った時、
装備モンスターの攻撃力は100ポイントアップする。」

レプティレスならではの装備魔法だね。あいつらの効果ってやつかいだからなあ。

「レプティレス・ゴルゴン！ブラック・ローズ・ドラゴンに攻撃！」

「馬鹿な！？攻撃力1400で攻撃力2400のブラック・ローズ・ドラゴンに攻撃するなんて。自滅行為！」

いや、自滅行為じゃない。これがレプティレスの戦法。

そう思ってる間に互いの攻撃がぶつかり合った。

ミスティ LP4000 3000

「モルティング・エスケープの効果により、1ターンに1度爬虫類族モンスターはバトルの破壊から免れ、攻撃力が100ポイントアップする。」

ATK/1400 1500

「これでブラック・ローズ・ドラゴンは封印できたも同然。」

「『封印？』」

俺以外みんな驚いてるね。

そしてブラック・ローズ・ドラゴンは石化した。

「ブラック・ローズ・ドラゴンが石に！？」

「レプティレス・ゴルゴーンの効果により、レプティレス・ゴルゴーンとバトルしたモンスターは攻撃力が0になり、表示形式の変更ができなくなる。」

「何ですって!」

「何だよその効果!反則じゃん。」

反則って・・・。

ATK/2400 0

「フィールド魔法サベージ・コロシアムの効果発動。バトルしたモンスター1体につき300ポイントライフを回復する。」

ミステイ LP3000 3300

「レプティレス・ゴルゴーンと戦うものはすべて石となって朽ち果ててゆく。果たしてあなたは生き残れるかしらね。十六夜アキ。」

「私は守る。私の帰るべき場所を!」

「そう、でもどうかしらね。今頃あなたが崇めているデイヴァインも消えているころよ。」

「デイヴァインが?」

「彼を助けたいのならこの私を倒してからいくことね。もっとも、倒せたら話だけだね。」

「……ていうか、俺のこと忘れられてない？」

「……ごめんなさいね。完全に忘れてたわ。」

「……この決闘、干渉しないほうがよかったかな？」

「さあ、あなたのターンよ。坊や。」

坊や扱いかよ。まあ、中学生だからしょうがないか。

「俺のターン、アキさん、ブラック・ローズ・ドラゴン使っていい？」

「……いいわ。」

「ありがとう。助かる。俺は手札から魔法カード魔術師の書庫を發動。デッキから魔法カードを1枚手札に加える。俺は融合を手札に加え発動。手札のスパークマンと場のブラック・ローズ・ドラゴンを融合！」

「『ブラック・ローズ・ドラゴンを融合！』」「『」

何で驚くの！？俺のデュエル見てたら分かるはずだよ。アキさんはしょうがないにしても。

「E・HEROノヴァマスターを融合召喚！」

ATK/2600

「なるほど。ブラック・ローズ・ドラゴンは炎属性。ノヴァマスターはE・HEROと炎属性の融合で召喚できるモンスター。それを上手く利用したというわけか。」

説明ご苦労様です。氷室さん。

「・・・見事ね。」

「ありがとうございます。」

魔女状態のアキさんに褒められた。なんか違和感あるなあ。

「バトル！ノヴァマスターでレプティレス・ゴルゴーンに攻撃！」

「くっ！」

ミステイ LP3300 2200

「モルティング・エスケープの効果により、レプティレス・ゴルゴーンはバトルでは破壊されず攻撃力が100ポイントアップする。」

ATK/1500 1600

「更にレプティレス・ゴルゴーンの効果によりノヴァマスターの攻撃力は0になる。」

ATK/2600 0

「ああ、ノヴァマスターも攻撃力が0になっちゃったよ。」

それも想定済み。

「サベージ・コロシラムの効果により俺は300ポイントライフを回復する。そしてカードを1枚伏せてターンエンド。」

アキ&駆 LP4000 4300

「私のターン、バトル！レプティレス・ゴルゴーンでノヴァマスターに攻撃！」

甘いよ！

「リバーズカードオープン！速攻魔法マスク・チェンジ発動！このカードは自分フィールド上のHEROを墓地に送り、墓地に送ったモンスターと同じ属性のM・HEROを特殊召喚する。」

「M・HERO？」

フォーチュン・カップで使っていないから知らないのも無理ないか。でも龍亜は目の前で使ったんだから知ってるはずだろ！

「俺はノヴァマスターを墓地に送り、M・HERO剛火を特殊召喚！」

ATK/2200

「剛火は墓地のHERO1体につき攻撃力が100ポイントアップする。墓地にはスパークマンとノヴァマスターの2体。よって200ポイント攻撃力アップ！」

ATK / 2200 2400

「くっ！サベージ・コロシアムの効果により攻撃表示モンスターは必ずバトルしなければならぬ。いけ！レプティレス・ゴルゴーン！」

「迎え討て！剛火！」

剛火が出した炎がレプティレス・ゴルゴーンに直撃した。

ミスティ LP 2200 1400

「モルディング・エスケープの効果によりレプティレス・ゴルゴーンは破壊されず、100ポイント攻撃力がアップする。」

ATK / 1600 1700

「さらにレプティレス・ゴルゴーンの効果により剛火は石となる。」

ATK / 2400 0

「そしてサベージ・コロシアムの効果により私は300ポイントライフを回復する。」

ミスティ LP 1400 1700

「私はターンを終了するわ。さあ、あなたのターンよ。黒薔薇の魔女。」

「私のターン、畏発動！シンクロ・スピリッツ。このカードは墓地

のシンクロモンスターをゲームから除外し、そのシンクロ召喚素材モンスターを墓地より復活させる。私はブラック・ローズ・ドラゴンをゲームから除外し、夜薔薇の騎士とロード・ポイズンを特殊召喚。

夜薔薇の騎士 ATK/1000

ロード・ポイズン ATK/1500

「更に畏発動、次元回歸。ゲームから除外されたモンスターをすべてデッキに戻す。これでブラック・ローズ・ドラゴンはデッキに復帰。」

またブラック・ローズ・ドラゴンを呼びつもりだね。そしてあの効果を使うってところかな。

「・・・あなたの剛火、破壊してしまうけどいいかしら？」

「!? 魔女状態のアキさんが俺を気遣った? 魔女状態でもタッグパートナーには気遣いを見せるんだね。ちよつと驚きだな。」

「剛火を破壊するってどうやって破壊するんだろっ?」

「ここまでやってわかんないの龍亞!? ダークシグナー戦が終わったら龍亞は勉強タイムだね。それはともかく俺の答えは、」

「いいですよ。あなたの思っている戦略が今は最善の策だと思いません。そのためにマスク・チェンジ以外何も伏せなかつたんですから。」

「駆はアキ姉ちゃんが何をやるかわかつてるみたいだけど何をやる

「気なの？」

「わしもさっぱりわからんぞ。」

矢薙のじいさん・・・あなたもですか。

「そう、ならば遠慮なくいくわ。私はLv4のロード・ポイズンにLv3の夜薔薇の騎士をチューニング！冷たい炎が世界の全てを包み込む、漆黒の花よ開け！シンクロ召喚、現れよ！ブラック・ローズ・ドラゴン！」

ATK/2400

「ブラック・ローズ・ドラゴンがシンクロ召喚に成功したときフィールドのすべてのカードを破壊する。」

ブラック・ローズ・ドラゴンから出た嵐でサベージ・コロシアム以外のすべてのカードが破壊された。

「私のフィールドを破壊するためなら自らのブラック・ローズ・ドラゴンを破壊することもいとわない。気分がいいわ。黒薔薇の魔女と呼ばれるあなたがそんなに必死になってくれるなんて。けれどブラック・ローズ・ドラゴンの効果を使ってもフィールド・バリアの効果により、サベージ・コロシアムのカードは破壊できない。」

「あなたが私にどんな恨みを持つてるのかは知らない。けど1つだけわかる。あなたは本気で私を殺そうとしている。ならば私も本気で戦うしかない。」

「これはずっとあなたがデュエルしてきたことよ。」

「!?!」

「どうということだ？」

みんな驚いてるね。

「あなたは自分を救うという名目のために破壊だけを繰り返してきた。他人にどんな犠牲がであろうがお構いなしに。今度があなたが他人に与えた絶望を自ら味わう番。」

「私が与えた絶望？」

「そう。あなたが私と弟に与えた絶望。」

「私はあなたの弟なんて知らない！」

「そうでしょうね。あなたにとって私の弟はとるに足りない存在。私の弟は・・・あなたに殺されたのよ！」

「!?!・・・何ですって!?!」

言っちゃったね。衝撃の真実を。

ていつかまた俺のこと忘れられてるし・・・どうしよう???

第17話 ダークシグナー暗躍！憎しみの炎（後書き）

どうでしたか？

今回はアキ&駆vsミステイの決着。そしてディヴァインvsカーリーは？お楽しみに。

ご指摘やご感想お待ちしております。

お知らせ

誠に申し訳ないんですが、小説の更新を2、3週間止めます。

というのも今パソコンを修理に出してて小説の執筆ができないんです。それに代えのパソコンはインターネットに接続できないという始末。

なので小説の更新を一時止めます。感想の返信もパソコンの修理が終わってからになりますのでご了承下さい。

ただ、代えのパソコンがインターネットに接続できたらまた更新しようと思います。

では次回はいつになるかは分かりませんが、楽しみに待っていて下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9321u/>

遊戯王～CROSS HERO～

2011年10月2日01時26分発行